愛媛大学医学部
同窓会会報

2019 NOVEMBER No.35

発行日／令和元年11月1日
編集発行人／薬師神　芳洋
発行／愛媛大学医学部同窓会
〒791-0295
愛媛県東温市志津川
TEL(089)960-5989
印刷／太陽印刷株式会社
TEL(089)932-2881

表紙紹介

第35回愛媛大学医学部同窓会通常総会

2019年8月3日(土)　於 伊予鉄会館

CONTENTS

副会長挨拶 …… 2
卒業生からのメッセージ …… 3
新任教授からのメッセージ …… 4
退職教授からのメッセージ …… 5
活躍する卒業生 …… 6
愛媛大学医学部同窓会会則 細則 申し合わせ事項 …… 8
第35回通常総会報告 …… 9
50周年に向けて、二期生雄志座談会 …… 10
第71回西日本医科学生総合体育大会 愛媛大学総合優勝!! …… 13
海外医療研修に参加して …… 14
医学祭を終えて …… 17
校友会紹介 …… 17
同期会報告 …… 18
支部紹介 …… 19
医学部課外活動(文化部)紹介 …… 21
医学部医学科人事異動 …… 22
あとがき …… 23
お知らせ …… 24

副 会 長 挨 拶

羽藤　直人（平成元年卒、11 期生）　愛媛大学大学院医学系研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 教授

同窓会副会長を務めております耳鼻咽喉科・頭頸部外科の羽藤です。同窓会員の皆さまには、日頃から愛媛大学医学部同窓会の活動にご協力ご尽力いただき感謝申し上げます。さて、本同窓会は会員数が5,000名近くの大きな組織となり、３年後の医学部創立50周年に向け、盛り上がりをみせています。同窓会最大の目的は、母校愛媛大学医学部の活性化と発展にあると考えております。医学科長・医学専攻長として、愛媛大学医学部の活気あふれる現状を、ご挨拶として皆様にお伝えできることを嬉しく思います。

1.　医師国家試験

難易度の増した医師国家試験ですが、2019年の合格率は国立大で全国３位と素晴らしい成績でした。皆さまのご協力で維持されている国試対策用に建設された２階建ての勉強部屋では、毎年６年生が夜遅くまで切磋琢磨し勉強に励んでいます。また、毎年11月には同窓会の協賛にて予備校の講師による勉強会が開催されています。参加学生からは多くの感謝の声が届いており、国試合格率向上のための重要なイベントとなっております。この紙面を借りてお礼を申し上げるとともに、在校生には先輩に負けない頑張りと成果を期待しています。

2.　西日本医科学生総合体育大会

愛媛大学医学部は西医体で屈指の強豪校としての地位を確立しています。近年では、2017年に初めての総合優勝、2018年は残念ながら準優勝でしたが、2019年の第71回大会では再び総合優勝の栄冠を勝ち取り、深紅の優勝旗が愛媛大学医学部に戻ってきました。西医体の総合成績は、各競技の上位に割り振られたポイントを加算することで決定されます。2019年は400 ポイント以上を獲得し、２位に大差をつける総合優勝でした。愛媛大では準正課活動として部活動を推奨しており、多くの学生が活気あふれる取り組みを行っています。数年前に新築された武道館や、昨年大幅改修されたテニスコートなどハード面の改善だけでなく、受け継がれた愛大魂が実った成果だと思います。西医体は日本国内では国体に次ぐ参加者数を誇る大イベントとなっています。2020年大会では連覇を目指し、東京オリンピック以上の盛り上がりを期待しています。

3.　医学教育の国際認証評価

2018年12月に愛媛大学医学部医学科が、日本医学教育評価機構（JACME）による医学教育の分野別評価を受審し、無事認定を頂きました。と言われてもピンとこない方が多いかと思いますが、いわゆる国際認証評価のことです。今、日本の医学教育は転換点にあります。医学教育のグローバルスタンダードから鎖国していた日本では、「2023年問題」という黒船により開国を迫られ、全国の医学科が国際認証への対応を急ピッチで進めています。「2023年問題」は、米国医師国家試験受験資格審査 NGO 団体（ECFMG）からの、「2023年以降は認定を受けた医学校の出身者しか、米国内での医師免許の受験を認めない」、との通告により生じました。愛媛大学医学科の卒業生が、どれだけ米国で臨床医として活躍しているか不明ですが、医師の増加とライセンスのボーダレス化により、将来日本人医師が海外に活躍の場を求めるのは間違いありません。愛媛大出身の医師がガラパゴス化しないためにも、国際認証評価は必要です。受審に関わられた皆さま、本当にお疲れ様でした。

4.　愛媛プラチナドクターバンク

愛媛の勤務医再就職サポートプロジェクトが動き出しました。人生100年時代に適応した新しい医師の働き方を支援するため、定年退職後のベテラン勤務医を中心として、再就職を考える女性医師などを総合的にサポートする仕組みです。このドクターバンクでは、医師不足を中心とした地域医療問題へ即効性のある対応を行うことが可能で、愛媛県、愛媛県医師会、愛媛大学医学部と同窓会がタッグを組み、オール愛媛体制で運用を行います。県内の医療施設における医師需要を一元管理し、専任の職員による需給のマッチングを行います。プラチナのように輝く再就職ドクターをサポートし、長寿化をポジティブにとらえ、若手医師の老後不安の解消と働き方改革を同時に推進したいと考えています。2020年度から本格運用を予定しているこのプロジェクトでは、医師の立場に立ったきめ細やかな対応が無料で利用可能です。愛媛県内での再就職やU ターン就職を考えられている会員の皆様には、是非有効活用いただければ幸いです。

在校生および卒業生の皆さん、愛ある愛媛で生涯共に働きましょう！

伊賀瀬　道也（平成３年卒・13期生）

（愛媛大学大学院医学系研究科 抗加齢医学 教授）

このたび御縁をいただき、2019年４月１日に医学系研究科に設置された抗加齢医学講座の教授を拝命しました。私は平成３年に愛媛大学医学部を卒業後、日和田邦男先生の主宰される第二内科（現・循環器・呼吸器・腎高血圧内科学講座）に入局し、愛媛大学附属病院、公立学校共済組合近畿中央病院で研修を受けた後、大学院に入学しました。ラットのPCI再狭窄モデルにおける新生内膜とアポトーシスに関する研究で学位をいただくとともに、循環器内科専門医、老年病専門医の資格を取得しました。大学院卒業後には日和田先生の御高配により三木哲郎教授が主催される老年科（現・老年神経総合診療内科）に移籍し、第二内科から引き続いて循環器・老年医学の道に進むことになりました。留学は米国ノースカロライナ州ウェイクフォレスト大学のカルロス・フェラリオ教授のラボで、ARB（アンジオテンシン受容体拮抗薬）オルメサルタンのACE2-Angiotensin（1-7）系活性化作用について研究を行いました。帰国後の2006年に新たに立ち上げられ私が実務を担当することになった「抗加齢センター（現・抗加齢予防医療センター）」での仕事が今回の寄附講座の設置につながりました。

本講座は新田ゼラチン株式会社の寄附講座であり、その主目的は「健康寿命の延伸」です。健康寿命を短縮させる原因の一つに「フレイル」があります。フレイルとは、加齢による筋力低下や認知機能低下など身体機能の低下全般を指した言葉で、早期の介入により健常状態に戻りうる状態をさしています。そこで本講座では、フレイルの予防に向けた取組みの一つとして、まずは新田ゼラチン株式会社の「低分子コラーゲンペプチド（CP）」の臨床研究を行います。CPを摂取すると、小腸で吸収、分解されるのですが、アミノ酸以外に一部分はアミノ酸が２つ結合した「ジペプチド」という状態で血中を循環し、血管、筋肉、骨など各部位の細胞の働きを調整するシグナルを与えます。私たちはすでにCPが血管弾力性を改善するというデータを報告していますが、これ以外にもCPには筋力低下、認知機能低下などの予防効果、血糖値の改善効果などの可能性が報告されています。

寄附元の新田ゼラチン株式会社は、大阪に本社を持つ東証一部上場企業ですが、愛媛県松山市生まれの新田長次郎氏が創業した会社の一つです。松山大学は新田氏の出資をもとに創立されたことから、松山大学同窓会は、新田氏の雅号を冠し「温山会」と呼ばれます。

抗加齢医学講座は、まずは５年を一区切りと考えており、CPを中心とした臨床研究を行いますが、2025年に「いのち輝く未来社会のデザイン」として開催され、アンチエイジングも大きなテーマである大阪万博も見据え、抗加齢・予防医療センターを中心に大阪での活動も展開していきたいと考えています。同窓生の皆さまにはますますのご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

竹葉　淳（平成８年卒・18期生）

（愛媛大学大学院医学系研究科 救急航空医療学 教授）

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、令和元年８月1日付けで、救急航空医療学講座の教授を拝命しました、竹葉淳と申します。どうぞよろしくお願いいたします。救急航空医療学講座は、平成29年２月１日にスタートした愛媛県ドクターヘリ事業に合わせて設置された講座です。基地病院である愛媛県立中央病院と協働して、ドクターヘリ業務、業務を円滑に遂行するための関係各機関との連携調整や研究活動、スタッフの増員・育成・教育が任務です。講座は私を含め４名で構成され、もともとは全員救急医学講座所属のメンバーであり、大学病院の日常診療にも携わっています。

私は、整形外科ベースの救急医です。平成８年に愛媛大学を卒業後、愛媛大学整形外科に入局し、医学部附属病院と、宇和島社会保険病院（現JCHO宇和島病院）で研修しました。その後愛媛大学大学院にて、神経因性疼痛と脊髄損傷の研究を行い、卒業後の平成14年から６年間、三原市の興生総合病院にて、特に整形外科外傷、手外科疾患の経験を積みました。この病院は24時間365日救急車を受け入れる病院でありながら、リハ病棟や療養病棟、老人保健施設も併設し、全ての患者さんの経過を最後まで診る事ができて、この経験が私の整形外科医としての礎となりました。平成20年から愛媛大学病院に戻り、股関節グループに属して、変形性股関節症に対する人工股関節置換術や各種骨切り術を教えて頂きました。また、創外固定器を用いた脚延長術や肘離断性骨軟骨炎の治療にも取り組みました。さらに、三原での経験や股関節グループでの骨盤周囲の手術経験を基に、救急部の先生方と、大学病院に運ばれてくる多発外傷患者さんの整形外傷治療を担当しました。これが縁となり、平成25年７月に救急医学講座へ異動し、整形外傷治療を担当しつつ、重症救急患者の全身初期評価と治療、集中治療、さらに災害医療を教えて頂きました。脊髄損傷の基礎研究も継続しています。そしてこの度、前任の佐藤格夫先生が救急医学講座教授に就任され、私がその後任で救急航空医療学講座に異動となった次第です。

このように私は、何かを極めてきた訳ではなく、その時々に与えられた環境ですべきことをしてきただけです。そしてちょっと変わった形で救急医療に入りましたが、整形外科医時代から今まで、諸先輩や同僚から教わった事全てが一つに繋がり今の私を形成していると感じています。愛媛県の救急医療は各地域の先生方の献身的な努力で、ぎりぎり維持できている現状です。ドクターヘリが少しでも地域医療に貢献できるように、そして、若い先生方が様々な形で救急医療に関わる事ができる体制の構築を目指し全力を尽くす所存です。

新任教授からのメッセージ

江口　真理子

（愛媛大学大学院医学系研究科 小児科学 教授）

愛媛大学医学部同窓会会員の皆さま、このたびご縁を賜り、令和元年５月１日より愛媛大学大学院医学系研究科小児科学講座の教授を拝命いたしました。どうぞよろしくお願い申し上げます。私は平成３年に広島大学医学部医学科を卒業し、広島大学医学部小児科に入局しました。その後広島大学原爆放射能医学研究所、国立小児病院小児医療研究センター（現：国立成育医療研究センター）、英国がん研究所、獨協医科大学血液内科で血液腫瘍の診療や研究に携わり、平成20年に愛媛大学小児科学講座に赴任いたしました。愛媛大学では前教授の石井榮一先生のご指導のもと、小児の血液腫瘍や遺伝性疾患の診療や研究を行うとともに、年齢にかかわらず十分な遺伝医療（ゲノム医療）の恩恵を受けられるよう、様々な診療科の先生方と連携し検査システムや診療システムを立ち上げてまいりました。これらの仕事を進めていくことができたのも、愛媛大学の同窓会の皆さまのおかげと心より感謝いたしております。

愛媛大学小児科学講座の役割は研究、教育、診療と広きに渡りますが、まず進めなくてはならないことは、次世代の育成であると考えます。優しく思いやりのある医師、最先端の医療を目指して、研究や教育にも力を注いでいける医師を育てていきたいと思います。

次世代を担うべき若手の先生方には、愛媛で多くの経験を積んでいただくとともに、是非一度は愛媛以外の地にも、できれば海外にも出て、最先端の医療のあり方を学び、様々な経験を通して社会の多様性を受け入れることができる、大きな心を育てて欲しいと思っております。そして学んだことを愛媛に還元し、愛媛の医療をさらに発展させていただきたいと願っております。

もう一つ、人材とともに後世まで残せる財産は研究だと思っております。基礎系研究室の先生方にもご指導をいただきながら、小児科の仲間とともに、後世につながる研究を押し進めていく必要があります。そのためには小児科医となった早い時期から研究に触れる機会を多く持ってもらい、リサーチマインドをもって診療にあたることができる医師を育てていきたいと思っております。

大学の役割である研究・教育・診療を滞りなく推進するためには「連携」が重要と考えます。同窓会の皆さまにご指導をいただきながら、他診療科や基礎系講座の先生方との連携、地域の病院の先生方との連携、愛媛県をはじめ各自治体との連携、中四国での連携、国内外との連携、そして患者・家族との連携、これらの「連携」をさらに進め、医療の発展に寄与していきたいと思っております。

安心してこどもを産み育てられる愛媛県であるよう、小児科スタッフ一同とともに努めてまいります。今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

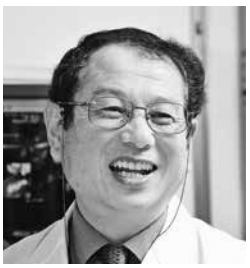
内田　大亮

（愛媛大学大学院医学系研究科 口腔顎顔面外科学 教授）

愛媛大学医学部同窓会員の皆様、平成31年４月１日付けで、口腔顎顔面外科学講座の教授を拝命いたしました内田大亮と申します。この度は、同窓会へ入会させていただき感謝いたします。私は平成７年に徳島大学歯学部を卒業し、徳島大学大学院歯学研究科に入学後、愛媛県出身の川又均博士に師事し、主に口腔癌の浸潤転移機構の解析、唾液腺癌の分化誘導療法などの研究を行いました。大学院修了後は、徳島大学分子酵素学研究センター（現：疾患酵素学研究センター）にポスドクとして勤務し、愛媛大学医学部第一内科出身の松本満教授に師事いたしました。平成13年より徳島大学歯学部口腔外科学第二講座に復職し、主に口腔癌、顎変形症、歯科インプラントなどの治療と研究を行いました。平成26年から獨協医科大学口腔外科学講座に准教授として赴任し、恩師でもある川又均教授のもと、約５年間は口腔癌と口唇口蓋裂の手術と治療をひたすら行いました。

私は教授就任にあたり、以下の３つを進めていきたいと思っています。一つ目は私のライフワークである口腔癌、顎変形症、口唇口蓋裂、歯科インプラントの治療と研究です。臨床面では、手術により疾患を臨床的に治癒させることのみに重きをおくのではなく、術後のQOL改善やフレイルの予防・回復を考慮した、歯科医師だからこそできる咬合や摂食嚥下機能の回復を行っていきたいと思います。また、研究面では、愛媛大学の豊富な研究機器を活用し、その成果を世界に発信していきたいと考えています。二つ目は、院内各診療科との連携と院外の病診・病病連携の促進です。特に院内での周術期等口腔ケアには積極的に介入し、医科入院患者の在院日数の短縮のみならず、生命予後の改善を目標にしたいと考えています。３つ目は、歯科医師の育成です。当院は愛媛県で最大の歯科臨床研修施設ですが、医師と対等に話のできる歯科医師を育て、当院で研修してよかったと言ってもらえるような教育をすることが私の使命だと思っています。

愛媛県に居を構えるのは初めてですが、私の出身地は香川県丸亀市、大学も徳島ですので、根っからの四国人です。現時点で、愛媛県民歴５ヶ月の駆け出しですが、前述のごとく、愛媛県とは不思議なつながりがあり、本学への赴任にも運命を感じずにはいられません。患者さんを含め、いろいろな職種の方と接すると気候だけではない四国独特の暖かさを感じることができ、「ああ、故郷に帰ってきたなあ」と実感しています。浅学非才ではございますが、今後共ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



望月　輝一（２期生）

（愛媛大学大学院医学系研究科 放射線医学 教授）

愛媛大学医学部教授退任にあたって

同窓会から、退職する教授は退任にあたって何か書いて下さいと依頼されてこの文章を書いています。1974年に愛媛大学医学部に入学（２期生）から2020年３月の退任までの46年間、楽しかった思い出が沢山あります。古い人間の私にしか書けない黎明期の愛大医学部の思い出も書き入れたら長すぎと言われたので、残念ですがその辺は全部省略しました。

<アピールできる仕事内容>

世界にアピールできる仕事が２つあります。1つは赴任先の愛媛県立今治病院に中国四国地方で初めて導入された回転型ガンマカメラを用いて、世界に先駆けて行った「心電図同期心筋SPECT」で、今では専用のソフトも出来て世界中で行われています。もう一つは「心臓・冠動脈CT」です。通常のヘリカルCTを用いて冠動脈や心臓の2D/3D動画＝4D-CTを世界で初めて行い、CTの心臓イメージングへの可能性を示しました。心カテをしなくても冠動脈の狭窄や心機能・心筋灌流＆予備能が評価でき、心臓ＣＴは世界中で行われるようになっています。心臓CTで沢山の患者さんを救えたかな。

<放射線科教授時代>

巡り合わせで2004年元旦に放射線科教授に就任しました。同窓としては初の臨床系教授でした。私がプライオリティをおいたのは人材(入局)の確保でした。皆で一生懸命に勧誘活動をして、最近の５年間では入局は毎年4～5名、大学院生も2名前後を確保でき、臨床も研究も国内外にアピールできる様になりました。毎年国際学会に毎年35演題以上、英論文20編以上が発表できるようになっています。そのおかげで沢山の国内外の学会や講演に行きました。国内外を駆け回ったことで沢山の旅の思い出があります。教授になってからは、学会や研究会の代表などの管理・運営で時間が取られて、第一線で研究を続けることは難しくなってしまいましたが、教室全体で臨床研究を活発に行う事が出来ました。教授就任前の自分は楽しく臨床研究やアイデアの実践を出来ていたので、今の私の仕事とは若い先生にそのような環境をつくってあげることだと思っています。「忙しくても楽しく」を目指してやってきた教授生活ももう少しで終了です。放射線科はこれからも仲間を増やして「愛媛の医療を良くする」を目指してやっていきます。今後とも愛媛大学放射線科を暖かく見守って下さい。

高田　清式（３期生）

（愛媛大学医学部附属病院 総合臨床研修センター 教授）

愛媛の創設時期に入学して

本医学部に昭和50年に三期生で入学して44年経ち、今年度で教授を退職するに当たりご挨拶申し上げます。高校時代から数学に興味があり早稲田大学理工学部数学科にて関東の寒さや頻回の地震を気にしつつ学生生活を謳歌していました。が、数学の理論などを考えているうちにふと人間を相手にしたくなり医学部受験を思い立ちました。温暖で、社会科が入試科目になく、新設の医学部で新しい機器で設備も良いだろうといった漠然とした理由で、本学を受験しました。入学し医学部に初めて来た時は、まだ病院は建築中で、広い敷地に研究棟と福利会館があるのみで殺風景で何か不安でした。講義室で須田正巳初代医学部長と木村忠治病院準備室長（翌年亡くなられ、小林譲教授が初代病院長に就任）から活気のある話を聞き、少し安心したのを思い出します。帰り道は伊予鉄横河原駅まであぜ道の中を歩きました。（記憶では電車の駅が医学部の正面まで将来延長する話もありましたが）、本学の敷地が溜池（籠池の名）だったこと、オイルショックの影響で研究棟の天井が低く造られたことを後に伺いました。入学数日後の下校前に全学空手部員の勧誘に捕まり、少年マガジンで有名だった芦原英幸師範にも興味があり入部し硬派な医進課程を送りました。当時仮進級などなく1科目でも単位不足なら専門移行ができず1学年で20～30人が留年しましたが、無事進級し解剖や生理などの講義や実習が始まりました。あまりにも講義の出席者が少なく当時の生理の教授が本学の将来を心配されていたのを思い出します。グラウンドやテニスコートは石ころだらけで当時の各サークル部員がコツコツ清掃をし（今年の西医体で総合優勝とは隔世の感があります）、また用務員さんが南側の道沿いに苗木を懸命に植樹していたのもこの頃でした（今は大木に成長）。5年生の時（濡れ衣と考えられる）教授の汚職嫌疑があり当時の新聞に「医学生が騒がないのがおかしい」と学生を煽り焚きつける記事が載り新聞の光と影を実感し、むしろしっかり医学を習得し地域医療に貢献すべきと再認識しました（当時自治会会長でしたが、騒いで解決するものでなく静観を貫きました）。卒後は第一内科にて講師まで勤め、平成15年から若手医師の教育部門の総合臨床研修センターに移り、19年から教授職を務めています（平成24年より地域医療支援センター長も兼任）。「愛をもって接する」「チーム愛媛」を合言葉の研修プログラムやシミュレータ設備は自慢ですが、ぜひホームページなどでご確認ください。来年は発展を期待し次世代にバトンタッチしたいと思います。今まで、同窓会会員の皆様お世話になりました。

「加速する時代」の近況報告

岡山　英樹（10期生）
（愛媛県立中央病院 循環器病センター）

10期生の岡山と申します。現在、愛媛県立中央病院循環器病センター・循環器内科でインターベンション治療を中心に仕事をしております。私は平成元年に当病院で研修を行いました。今年、令和元年の研修医を指導していると、当時を思い出し隔世の感があります。また、同窓生のご子息ご息女が病院見学、クリニカル・クラークシップや初期研修医として当院をローテートに訪れると、歳をとったことを実感します。体感的な時間がどんどん加速しており、一瞬一瞬を大事にしなければと考えるこの頃です。

皆様がポリクリや救急実習で必ず訪れた「県中」ですが、現在はご記憶にある旧病院ではありません。建て替えを行い、2015年12月にグランドオープンしました。屋上にヘリポートができたため、救急の機動性がドラスティックに向上しました。当院の特色は２つ、救急医療と高度医療です。高度救命救急センターを併設した「ザ・野戦病院」であるため、必然的に急性心筋梗塞や急性心不全の患者さんの受け入れが多くなり、夜間の緊急カテーテル治療の呼び出しなど、体力的にきつくなっているこの頃です。高度医療については、循環器病センターとして「都市部と変わらない医療を愛媛の患者さんに提供すること」を理念としており、日進月歩の医療を常にキャッチアップする努力をしております。低侵襲化は世の中の必然であり、最近では経カテーテル大動脈弁置換術（TAVI）、経皮的僧帽弁形成術（MitraClip）がトピックであり、当院でも多くの患者さんを治療しております。

現代は、加速的に進歩するテクノロジーにより、いわゆるアンメット・メディカルニーズが次々と解決されている時代であると言えます。同時に高度化、複雑化していく医療に対しては、多職種によるチームアプローチが極めて重要です。このような時代にハートチーム全体をマネージメントし、数々の貴重な経験をさせて頂いていることは非常に幸運であり、有り難く思っております。心臓外科の主任部長は愛媛大学の同窓生の石戸谷浩先生であり、本当に色々と助けていただいていることを付け加えておきます。

先日、飛行機で耳鼻咽喉科の羽藤教授と隣り合わせ、愛媛大学医学部のビジョンについていろいろ伺うことができ、とても楽しいフライトとなりました。10年後、20年後の母校のさらなる発展を予感させる夢のあるお話であったことをご報告して、筆を置きたいと思います。

へき地最初の勤務地だった沼島をバックに

卒後 30 年、まだ淡路島でやっています

山岡　雅顕（10期生）
兵庫県・淡路島 洲本市応急診療所所長・洲本市国保堺診療所所長・洲本市国保上灘診療所所長・洲本市国保五色診療所医師・兵庫県立淡路医療センター非常勤医師（禁煙専門外来担当）・洲本市産業医日本禁煙学会理事

私は地域医療・へき地医療を志して医学部に入りました。1年時に重信キャンパスで講義を受けた医学概論で「将来希望するのは、専門医か、研究者か、地域医療か」で学生に手をあげさせた時、おおよそ1/3ずつで同志が多いことを心強く思ったものですが、いざ卒業になるとほとんどが専門医（当時はいずれかの医局に入局するのが当たり前でした）をめざしていました。その中、大学でローテート研修をさせて欲しいと、勇気を振り絞って何人かの教授に頼み（教授室の前で相当躊躇した思い出）、最初に幅広い内科医を育てる方針だった第一内科に入りました。２年目にへき地医療を目指すなら大学より地域の病院での研修を勧められ、当時第一内科の関連病院となったばかりの兵庫県立淡路病院（現、淡路医療センター）で、へき地医療を義務付けられた自治医大卒業医らとともにローテート研修をさせて頂きました。これが現在まで30年以上になる淡路島勤務のスタートになります。

研修後は、淡路島の南方にある沼島（ぬしま）という人口800人ほどの島の唯一の診療所に、高齢で引退した医師の後任として赴任しました。ここでは保育園や小中学校の校医も担当し、島民全世代のあらゆる病気やけがに対応することでとても勉強になりました。また沼島住民の死因を保健所の協力で調べたところ肺癌が多いことから、禁煙治療やタバコの害の啓発、連絡船の禁煙運動などを行い、新聞社の報道協力も得て、当時まだ珍しかった連絡船の全面禁煙を勝ち取るなどしました。沼島での４年の勤務ののち、淡路島内で地域医療に熱心な町長がおられた五色町の無医地区に新設された診療所に赴任し、その後、市町合併や診療所医師の減少などもあって、現在は肩書にあるように４つの診療所と１つの病院を兼務し、日本プライマリ・ケア連合学会でも活動しています。

学生時代は本学の合唱団と医学部グリークラブに所属し、いまも地元の合唱団で歌っています。また保健医療研究会というフィールドワークを中心とするサークルで、病気の背景や人や地域全体を診る重要性を学んだことは卒後ずっと役立っており、禁煙活動にもつながっているのだと思います（1）。

最後に、これから毎年８月第一土曜に同窓会総会が開催されるとのことで、故郷愛媛に帰る日にしたいと思います。皆様もぜひ！

（1）禁煙ドクターが教えるタバコのやめ方 双葉社スーパームック

アメリカで成人先天性心疾患専門医として働く

伊藤　誠治（26期生）

Washington Adult Congenital Heart Program, Children's National Health
Assistant Professor, Department of Pediatrics George Washington University, USA

私は愛媛大学医学部を2004年に卒業後、沖縄県立中部病院で初期研修、更に横須賀米海軍病院で研修した後、卒後3年目に渡米しました。同級生から誘われUSMLE（United States Medical Licensing Examination; 米国医師免許試験）・米国医師免許の問題集を4年生時にやり始めたのが始まりでした。また5年生時に沖縄県立中部病院に１週間の見学実習を行い、レジデントや他大学からの見学者に影響を受け、「どうせなら試験を受けしてしまえ」という勢いでUSMLEを6年生時に取得し、これがきっかけで米国に移ることになったのかなと思っています。

米国では内科小児科レジデント、小児循環器フェロー、そして成人先天性心疾患フェローの臨床トレーニングで米国各地を巡り、2015年よりワシントン DCにあるChildren's National Health という小児病院で（成人病院のMedStar Washington Hospital Centerとも提携）働いています。

日常業務は成人先天性心疾患外来と小児循環器外来と病棟コンサルトを中心に、また週１日は心臓 MRIをしています。外来患者は成人が70%、新生児を含めた小児年齢が30%、また５%ほどは循環器既往のある妊婦患者です。その他、年に４週間は小児循環器科医スタッフの一人として病棟担当医もしています。学生時代は総合診療がしっかりできる医師を志していましたが、少し特殊な循環器専門医になった今でも、いろいろな年齢層・背景の患者さんと接することができるのは大きな喜びです。

卒後医学教育にも力を入れており、研修医や医学生と外来診療、また年15回ほどの教育セッションも行っています。病院からサポートを受けて教育学修士の勉強をさせてもらい、また病院外では米国内科専門医機構の問題作成委員、またACHD（The Adult Congenital Heart Disease）learning center という無償教育サイトの運営メンバーにもなっています。

アメリカのビール文化やオイスター（牡蠣）にも傾倒し、いつかオイスターバーをひらくことを夢見ています。年４週間ほどの有給があり日本にも年3～4回ほど帰国し、時々ブラタモリのように、日本の町をブラブラして様々な再発見を楽しんでいます。医師としてのキャリアもまだあと25年程かと考えていますが、自由な発想でワクワクするような将来設計を描いたりしながら楽しくしています。短期病院見学も簡単にできます。ワシントンにお越しの際は私まで気軽にご連絡ください。

愛媛大学医学部に感謝するとともに、今後また同窓生のネットワーキング・良き出会いを楽しみにしています。

愛媛大学医学部同窓会に寄せて

愛媛県医師会会長　村上　博

昭和32年生まれ、62歳。昭和57年に順天堂大学を卒業し、愛媛大学第一内科と松山赤十字病院内科・循環器科で研修をさせていただきました。そのころ既に父親は病床に伏しており大学卒業３年目には父の後を継いで開業医の診察室に常勤医として座ってしまいました。患者さん方からは「お父さんの頃はねえ」と常に比較され、患者数も減り不安な毎日でした。以後全て独学で勉強するしかありませんでした。この学歴のなさ職歴のなさが私にとって生涯の強い劣等感になっています。38歳で松山市医師会理事に呼ばれ、平成24年から平成30年まで松山市医師会長を務めました。松山市医師会長として市内で新しく開業される医師の面接をさせていただきました。愛媛大学卒業生のみなさんは、臨床・研究・教育などに精一杯能力を発揮され輝いて見え、可能性の塊のように思います。今では新しく開業される医師の９割近くが愛媛大学卒業生で占められています。愛媛大学医学部の同窓会が力強く発展していくことを祈念しています。現在の愛媛県の医療を愛媛大学医学部抜きにして語ることはできません。県下の全ての医師は、直接に間接に大小何らかの形で愛媛大学医学部の恩恵を受けています（一見関係ないように見えても、例えば「救急医療がうまく回っている」ことから、夜に休め家族で旅行に行くこともできます。その救急医療を支えているのが県下では愛媛大学の先生方です）。その後私は、平成30年６月に前職の久野梧郎先生を継承して愛媛県医師会長職に就任しました。私は、皆様の背中を押しながら坂道を一緒に登る奉仕型のタイプだと思います。「俺についてこい」という能力はありません。

昨年７月に愛媛県は西日本豪雨災害に遭遇しました。県下で27名が死亡、１名が行方不明です。他に災害関連死が６人。大きな河川が氾濫し広範囲で家屋や医療機関が水没や床上浸水、停電、断水など被災しました。困難な状況に立ち向かった医師たちの不断の努力には頭が下がります。

令和の時代の新しい千円札に北里柴三郎先生が選ばれました。大変晴れがましい気分です。医療が国民にとって最も大切な社会的共通資本であることを示したものと思います。北里柴三郎は日本医師会の前身である大日本医師会の創設者です。駒込の日本医師会館の玄関を入ってすぐに北里柴三郎の立派な銅像があります。野口英世もそうでしたが、医学を医療に適応した先駆者たちが、こうして国民の身近な存在であることはありがたいことですが、一方では、私たち医師に課された社会的使命がいかに大きいかを改めて意識したところです。

北里　柴三郎

国は2030年にはマクロ的には医師は飽和すると発表しています。愛媛県下ではまだまだ医師不足のように感じますが、2035年に向けて10年前から準備する必要があると言われており、最初に取られる対策が医学部定員の削減です。しかし一方で2036年に愛媛県下では659人医師が不足するという県庁の発表も出ています。働き方改革の問題も喫緊です。愛媛大学医学部には地域医療への貢献、世界に発信できる研究、優れた教育と後進の育成、いずれの面でも一県一医大の時代のトップランナーとして生き残り、輝き続けていただきたいと思います。重大な転機を迎える愛媛県の医療界における愛媛大学医学部のプレゼンスを大いに高めていただきますよう宜しくお願い致します。

第35回愛媛大学医学部同窓会総会を開催しました

2019年８月３日16時より、松山市伊予鉄会館アイビスホールにて、第35回愛媛大学医学部同窓会総会を開催しました。当日は定例総会（審議事項下記）

＃１．昨年度予算の決算と本年度予算の承認
＃２．本年度役員の推薦と承認
＃３．全学校友会常任理事、理事、幹事選任の承認
＃４．今後の同窓会総会のあり方
＃５．50周年記念会の方向性の検討
＃６．その他審議事項

に引き続き、特別講演（下記＃1、＃2）を開催。

＃１．伊藤　誠治先生（愛媛大学医学部26期生）
Assistant Professor, Department of Pediatrics
George Washington University, USA
演題　「プライマリケアマインドの循環器専門医を目指して：ワシントンDCに繋がった愛媛での転換期」

＃２．村上　信五先生（愛媛大学医学部２期生）
名古屋市立東部医療センター病院長
（前名古屋市立大学病院耳鼻咽喉科頭頸部外科教授）
演題　「人生何はともあれ、運・鈍・根」

更にその後、特別ゲストとしてお招きした山下政克医学部長のご挨拶、一期生の櫃本真聿先生による乾杯のご発声の後、会員懇親会を行いました。ご参加の同窓生は、旧友とのしばしのご歓談の後、夜市で賑わう松山での暑い2次会に消えて行かれました。

毎年８月の第１土曜日、同窓会総会を開催致します。2020年８月１日（土曜日）もどうか皆様ご参加ください。各学年（期）同窓会との同日開始もお考えください。

（文責　同窓会会長　薬師神芳洋）

50周年に向けて、二期生雄志座談会

愛媛医療センター
院長　岩田　猛

＜薬師神＞

まず、医学部卒業時を伺います。入局や基礎研究に移られた際には１期生しかいませんでした。他大学から来た人も多かったと思います。

＜岩田＞

入局は10人位でしたね。　結構、同級生はいました。まだ、医学部も附属病院も創成期。きちんとしていかないといけないという雰囲気が教授や指導医の先生方にはありました。

私が入局した国府教授（第２内科）は学生には厳しくはないのですが、医師にはとてもとても厳しい先生でした。教授回診時には、研修医やその指導医の先生にまで厳しく指導されました。だからなのか、指導医の先生方も回診前は特に丁寧に研修医を教えていました。一体感があり、全員で附属病院の医療を良くしようという雰囲気があったと思います。

＜薬師神＞

愛大外で研修を行われた村手先生はいかがでしょう。

＜村手＞

卒業後は、名古屋大学で研修をしました。名古屋は既にスーパーローテーションをし、各科をまわっていました。セクショナリズムが強く他科の先生や先輩に相談することができる雰囲気がありませんでした。愛媛は3つの内科の中では境目がなくて、困ったら同級生とか先輩・後輩に聞けるのは、とても羨ましかったです。

＜薬師神＞

そもそも、名古屋大と愛大では各科の人数が全然違います。当時の附属病院は、内科も共同病床でしたから、当然、行き来もありました。先輩も１期生しかいなくて、指導教官の他に先輩や同級生しか頼れる人がいない、という状況の違いはあるかと思います。

＜村上＞

地元で研修するのは、岩田先生の言われるメリットがあります。同級生がたくさんいるというのは、宝です。当時はほとんどの学生が愛媛に残ったと思うので、研修医でもたくさんの仲間に囲まれ、他県などに出て行く学生の方が少なかったと思います。

＜薬師神＞

今では、地元に残る研修医は少なくなっています。卒業生の半分程度しか愛媛県内に残らず、地域枠などもありますが、優秀な学生ほど愛媛から出て行ってしまうという印象があります。愛媛県に学生が残らないという状況の中、在校生や卒業生に何か要望がありますか？

＜兼光＞

よく言われるのが、地域から目が離れてしまうのは、学生時代や研修医の時に、実際に地域を見ていないから、ニュースなどを見て都会へという思考が働いてしまうということです。地域で実際に医師がどういう形で働いているかを見る機会を持つと、地域に行ってみようという気持ちを、地元で研修する人や、働こうという人も増えるのではないでしょうか。

＜薬師神＞

兼光先生は県外から来られて、ずっと地域医療に貢献していますね。

名古屋市立東部医療センター
病院長　村上　信五

＜兼光＞

貢献というほどではないです。それに、愛媛県の内外を問わず、いろいろな分野で卒業生の多くの方が頑張っておられます。研修を終えて勤務医として何年か経ったとき、中国地方の診療所に行こうかと思ったことはあります。その際、当時の上司の藤田教授（第１内科）から「せっかく愛媛に縁があって来て、まだまだ愛媛県にも医師が不足しているところがあるのだから、そこへ行って自分がやりたいことをしたらどうか？」と言われました。その言葉がきっかけとなって、今も変わらず愛媛県内にいます。

＜薬師神＞

兼光先生は外来診療だけでなく、在宅や施設での看取りといった地域包括ケアにも取り

組まれていて、地域医療を目指す若手にも刺激になると思います。松田先生は基礎医学分野に進まれました。基礎に行く学生は当時も今もそんなにいなかったと思います。どうして基礎に進まれたのでしょうか。

大洲市国民健康保険河辺診療所
院長　兼光　望

＜松田＞

当時は少ないことはなくて、私たち２期生は基礎に進む人も多くいました。解剖や病理は特に人気があったと思います。どうして基礎かと言われると、そもそも私にとっては、あんまり臨床が面白いと思えなかったからですね（笑）。それと一番背中を押したのは、細菌学教室の内海教授から言われた「医学を支えているのは基礎医学である。臨床医学は消費者で、基礎医学は生産者なんだ。消費者ばかりが増えて、生産者がいなかったら飢えてしまうだろう。だから、生産者にならないか？」という言葉です。すごい事を言うなと驚き、だからこそ、ついて行こうとも思いました。

＜薬師神＞

内海先生は、学生にズバッと格言を残される名物教授だったと伺っています。現在は、基礎に行く学生が少ないと言われています。研修制度の後でないと進めないという現状はどう思われますか。

＜松田＞

現在、学生が少ないのは、ちょっと寂しいですね。基礎は、面白いことがたくさんあるんですけどね。現状では、新研修制度が始まり、基礎で研究してくださる先生はたった３人しかいません。解剖や病理生理など、これから複数講座が一つになっていく傾向もあり、臨床重視という国の政策にも一因はあると思います。医学部出身で病気の理解をしている先生が、基礎を教えることも私は重要だと思っています。

＜薬師神＞

国の政策や講座合併の話なども出ました。そもそも大学そのものの将来が危ぶまれている時代でもあります。50年後に愛媛大学があるのか？ ということが、現実味を持って議論されています。医学部や附属病院が今後50年存続するために、先生方から要望はおありでしょうか。

＜村手＞

私は臨床研修の担当をずっとやっています。専門医制度によって、人中心ではなくて、症例中心主義になっていることがいろいろな問題の一因だと思います。症例中心主義によって、研修しないといけない症例が多く、いつまでたってもローテート制度が続きます。１人の患者さんを長く診療できず、途切れ途切れになっています。そうなると、ある患者さんのある疾患のある期間は診るけれども、地域医療で求められる地域や集団の中での要望など、いろんなことを考えられない医師が増えてしまいます。症例だけを集めがちで、その人に出てくる他の病気の兆候を見逃してしまうことに繋がっていきます。

もちろん、専門医は必要ですし、そのためにローテーションによって症例の経験を積む必要もあります。ただ、それをずっと続ける必要はありません。何年間と時期を区切って症例を学び、一方で患者さんとしっかり向き合うことも、今後、地域医療が求められる医療界にあっては、必要なことだと思っています。

＜村上＞

私は別の考えを持っています。いわゆる総合医と呼ばれるものは、医学生の約３割程度の人数でいいのではないかと思います。多くの学生や医師は今までのように専門医を目指し、そういった資格取得をした方がいいと思います。同じように全員が、研修医制度で２年もの間、全科をまわる必要もないと思っています。そういう経験は、地方では役に立つかもしれませんが、都会で役に立つとは思えません。

尾張健友会千秋病院内科
研修管理委員長　村手　孝直

なぜなら、医学は日進月歩。薬剤も機器も技術も、治療法は全てが変わっていきます。ですから、研修医で学んだことも数年経つだけで使えなくなってしまうこともあります。多くの方は専門医を目指し、常に最新のことを学ぶ一方で、総合医は定期的に様々な科の最新情報を学んだり、技術を習得したり出来る機会を作る方がいいのではないでしょうか。

＜兼光＞

総合医が、そんなに多くなくても良いという意見には賛成です。そもそも私たちが医師を目指した46年前には、医師不足という状況があり、しかし50年後に十分医師が足りる、余るのではないかということも言われていました。でも、実際は、全然余っていません。むしろ昔は、１人の医師がいろんなことをしていたけれど、今は複数の医師で行うこと

愛媛大学大学院医学系研究科
解剖学・発生学教授　松田　正司

が増えています。医師がやるべきことが多くなり、医師不足という状況が、特に地方においては変わっていません。

＜薬師神＞

基礎で要望することはありますか。

＜坪井＞

愛媛で行われている、手術手技を学ぶ松田先生の臨床研修センターはすごくユニークな取り組みだと思います。基礎にしても臨床にしてもユニークネスということがキーワードだと思います。簡単な話、東大で行われている研究のミニチュア版はいくら同じように研究したところで、別に愛媛でする必要はありません。だから、ユニークネス、愛媛大学の基礎医学の医師だから出来る研究、というものが求められていると思います。

卒業生を同窓会誌や医学会などで見ていると、むしろ愛媛の外に出ている人がすごく頑張っている印象があります。何がそれを育ててくれたのかというと、フロンティア・スピリットだと思います。医学部や病院については昨年の１期生の方たちも話していましたが、授業も病院も課外活動もすべて一からのスタートで、「手作りの医学部」と言われていました。だからこそ、フロンティア・スピリット、負けじ魂とも言えるものが育まれました。人と同じことをやっていてもそれは新設だから負けるけれども、私たちにしかできないことを見つけてやるというフロンティア・スピリットですね。基礎にたくさん進学したのも、他の歴史ある大学からすると異例ですし、愛大には伝統がないと言われた方もいました。それもかえって我々にとっては幸いで、転んでもタダでは起きない人が育ったと思います。歴史がないからこそ、夢が持てたのかもしれないですね。

＜兼光＞

今後は広報宣伝も大事です。研究や治療を地域の内外に伝えていく必要があります。せっかくいい研究をしているのだから、発表もし、社会貢献をしているということを大学がリードして伝えていただきたいです。

＜薬師神＞

いろいろな提案をありがとうございます。最後に一言ずつ、今の学生・研修医にメッセージをいただけますか。

＜兼光＞

せっかく総合大学の医学部に入学したのだから、医学部のクラブ活動もいいけど、本学のクラブに参加して、医学部以外の人と出会える機会を大切にして欲しいです。医学生以外の学生との交流をたくさんして下さい。

＜松田＞

医学部全体の雰囲気は悪くありません。我々が教えてもらった時代の先生たちのエネルギーが今も紡がれ、一生懸命学生を教えようという雰囲気があるのを学生は感じていると思います。愛大は留年率も圧倒的に低くて、でも勉強一辺倒ではない「おおらかさ」があります。伸び伸び勉強や活動をしながら、留年率が低く国家試験の合格率は高い。先生方が一生懸命教えてくれると言ってくれる学生は多いと思っています。

愛媛に残る学生が少ないというのは、愛媛にいる人からしたら問題に感じるかもしれません。逆に大学で伸び伸びしているから、外に飛び出していくエネルギーが残っているというポジティブな側面もあると思います。最近、クラブ活動も全国レベルで盛んですし、伸び伸びとした環境の中で臨床の先生方も手をかけてよく教育に関わって下さっています。基礎研究に来る学生は少ないですが、私は現状にそれほど不満がありません。楽観的過ぎるかもしれませんが・・・。

＜岩田＞

私たちは、医師をする上でいろんな経験が必要だと思っています。私も留学をしたのでより強く感じるのかもしれませんが、研修などでまわってくる学生に聞いても、海外まで行きたいと答える学生は少ないと感じます。もっと海外に興味を持って欲しいですね。

学生も研修医もまじめに勉強など励んでいるのはわかります。日本の医療も進んだので、海外に行ってまで学ぶことは昔より少ないと思っているかもしれません。しかし、いろんな経験をすることは医師にも必要です。医療を学ぶという以上に、一定の期間、違う文化の中で生活をし、いろんな人に会ってという経験をすることに意味があるのだと思います。もっと興味をもつように、何かきっかけも必要なのかもしれません。

先端研究・学術推進機構
プロテオサイエンスセンター
教授　坪井　敬文

＜坪井＞

岩田先生の意見にプラスします。私も、外の文化に触れて来た方が医師としても人間としても、一つ何か変わってくると思うんです。研修医や医師なら先進国で学ぶこともおすすめ

しますが、学生にはぜひ発展途上国にも行っていただきたいです。これはもう人生観が変わります。日本の現状からしても、外国の人たちがたくさん日本で暮らしていて、働く人はもっともっと増えていく時代。これからの医師のあるべき姿としても、グローバルな世界に身を置くということは是非やっていただきたいです。同窓会でアメリカや中国・台湾・韓国での学生レベルの交流をサポートしているのも嬉しいですね。

座談会の様子

＜村上＞

私が伝えたいのは「あなたは恵まれていますよ」ということ。重信は田舎ですが、自然があって、素晴らしい景色が広ってます。都会は建物ばかりで外が見えないので、可哀想です。ある意味、都会は狭い世間しか見えていないともいえます。愛媛・重信のキャンパスからは皿ヶ峰など連峰が見えて、気持ちが広がり人間のスケールも大きくなると思います。卒業生も先生も優しくて恵まれているのでそれを生かして欲しいですね。

また学生にいつも言っているのは、Boys be ambitious! とDoctors be patient! の二つ。Ambitiousはよく「大志を抱け」なんて言われますが、野心という意味もあって、私は学生にもっと野心を持って取り組んで欲しいと思っています。もう一つ、patientというのは耐える・忍耐強いということで、医師には必要です。今の学生を見ていると、コミュニケーションの問題なのか、患者さんの気持ちがわからないことが多いように思えます。医学部としては難しいんですが、勉強だけでなく、いわゆるサービス業の経験などもすると世の中が見えてくるし、患者の気持ちに添える臨床医なります。広く経験を積んで欲しいと思っています。

＜村手＞

私は、昨日１日を休暇にして東温市内をレンタカーで走りました。何処に行っても医学部が見えるんですね。それこそ、山で迷っても医学部を見つけたら方角がわかると言われるくらいですから。医学部の周辺は住宅地も広がりましたが、山の方には農家の集落も残っていました。こんなに近い場所に綺麗な棚田や段々畑が広がっていて生活している人がいる、でも普段は意識していないと思うんです。

近くにあるのに見えていなことはたくさんあります。海外留学もアルバイトも同じ事を言っているんだと思います。行ってみて、やってみて、角度を変えて物事や世界を見る、見つめ直す。そういう体験を積み重ねて欲しいですね。

＜薬師神＞

本日は、２期生の皆様にお集まりいただき、貴重なお話を拝聴出来ました。これからの愛媛大学医学部のみならず日本の医療や医学研究を担って行く若い方々にお聞かせしたい貴重な内容となりました。皆様どうも有難うございました。来年も８月の第１週の土曜日に皆様とお会いできる事を願っております。

2019年西日本医科学生総合体育大会で愛媛大学が総合優勝!!

令和元年の夏、体育系サークルが参加する第71回西日本医科学生総合体育大会で、愛媛大学がまたも総合優勝です。第69回大会でも総合優勝していることから、もはや上位常連校です。

詳細は、http://plaza.umin.ac.jp/~nisiitai/71st/　http://plaza.umin.ac.jp/~nisiitai/71st/pdf/result_sougou.pdf　をご参照ください。

順　位	大学名	得　点
1	愛媛大学	412
2	徳島大学	355.5
3	名古屋大学	330.5
4	岡山大学	328
5	三重大学	321
6	和歌山県立医科大学	290.5
7	岐阜大学	283.5
8	山口大学	273.5
9	福井大学	261.5
10	島根大学	259
11	京都府立医科大学	258.5

順　位	大学名	得　点
12	名古屋市立大学	256.5
13	鳥取大学	253
14	大分大学	250.5
15	奈良県立医科大学	247.5
16	高知大学	247
17	大阪大学	232
18	大阪医科大学	229.5
19	京都大学	228.5
20	浜松医科大学	226
21	金沢大学	214
22	佐賀大学	212.5

順　位	大学名	得　点
23	大阪市立大学	212
24	滋賀医科大学	211
25	九州大学	209
26	香川大学	205
27	長崎大学	203
28	宮崎大学	183.5
29	富山大学	173
30	関西医科大学	168.5
31	兵庫医科大学	165
32	久留米大学	152.5
33	近畿大学	149.5

順　位	大学名	得　点
34	産業医科大学	137
35	鹿児島大学	136.5
36	広島大学	134
37	神戸大学	124
38	川崎医科大学	108.5
39	愛知医科大学	107
40	琉球大学	106.5
41	熊本大学	101.5
42	福岡大学	88
43	金沢医科大学	78.5
44	藤田医科大学	48

海外医療研修に参加して

毎年同窓会では、海外医療研修に参加する医学科学生に資金援助をしています。今年も、参加した学生から研修レポートが届きました。

■ 長瀬　映美（６年生）

（左端）

私は2019年５月19日から６月１日までの２週間、中国の中国医科大学にて婦人科と小児科を１週間ずつ臨床実習させて頂きました。

婦人科では主に手術を見学させて頂きました。日本とは異なり中国では紹介状が無くても患者は大学病院など行きたい病院を受診することが出来るため、患者が総合病院に集中しており、患者数が膨大であるため一日に行われる手術件数が非常に多かったです。そのため軽症から、巨大な外陰部腫瘍など中国でも珍しい症例まで様々な症例を学ぶことが出来ました。開腹手術だけでなく腹腔鏡手術も日本と同様数多く行われていましたが、患者のプライバシー保護や清潔の概念などは日本と異なる点が多く、実際に自分の目で見て体験出来たことは非常に良い経験になったと思います。また小児科では回診や骨髄穿刺を見学させて頂いたり、教授によるレクチャーを受けました。家族が子供の検査結果や治療方針について何度も医師に確認してくる姿が非常に印象的でした。

中国医科大学には日本に留学経験のある先生方が多く居たため日本語で様々な事を教えて頂くことが出来ました。しかし日本語の話せない先生方とは自分の英語力不足でなかなか上手く意思疎通が出来ないこともあり非常にもどかしい思いをしたので、この経験を糧にこれからも継続して英語の勉強をしていきたいと思います。また慣れない土地で不安の中先生方や学生が優しく接してくれた事が非常に嬉しかったので、愛媛大学で留学生と接する機会があれば、今度は私が同じように迎えられたらと思います。

最後になりましたが、今回海外臨床実習という貴重な機会を頂戴するに当たりましてご尽力頂きました先生方、国際化推進室の皆様、またご支援頂きました同窓会の方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

■ 中村　憲司（６年生）

（右から２番目）

私は2019年５月19日から６月１日の２週間、中国医科大学で臨床実習をさせていただきました。中国医科大学は、中華人民共和国遼寧省の省都である瀋陽に位置し、旧満州医科大学と他二つの医学校が合併して1940年に設置され、古くから日本との関りが深い大学です。今回、このような歴史ある大学で臨床実習という貴重な体験をさせていただけたこと、非常に嬉しく思います。

私は今回の実習では、整形外科と救急科を見学させていただきました。整形外科では、主に外来、手術、病棟業務を見学させていただきました。中国では紹介状がなくても誰でも大学病院を受診することができるので、待合室は常に多くの人でごった返しており、椅子に座ることさえもままならない状況で、最初は中国の病院の人の多さに圧倒されてしまいました。救急科では、ひたすら搬送されてくる患者さんの初期対応と専門の診療科へのコンサルトを行っていました。

今回の実習に行く前では、中国の医療と日本の医療は全く違うものであると勝手に想像していましたが、整形外科を例にとってみても、朝と夕にカンファレンスと回診をして、日中は主に外来か手術をするという点で、日本と根本は同じであることに気づきました。また、１人でも多くの患者さんのために最善を尽くすという点では、どこの国の医療も同じで、一見忘れがちな大事な事を再確認することが出来ました。

また、病院実習以外でも様々な違う文化に触れることが出来て、今まで自分が常識だと思っていたことが他の人たちにとっては常識ではなかったり、留学しなければ気づくことの出来なかったことが多々あります。このような貴重な機会を設けてくださった、愛媛大学、中国医科大学の先生方、国際化推進室の方々、同窓会の皆様、今回関わってくださった全ての方々には大変感謝しております。本当にありがとうございました。今回の経験をこれで終わらせずに今後の人生に役立てていくことが一つの恩返しになると思っていますので、これからも日々精進していきたいと思います。

■ 福井　淳平（６年生）

（左から２番目）

私は2019年５月19日から６月１日の２週間、中国の遼寧省の瀋陽市にある中国医科大学の救急科で臨床実習を行ってまいりました。今回このような貴重な機会を設けてくださり誠にありがとうございました。

中国では日本でいう紹介状の制度がないため多くの人が最初から大学病院のような設備のそろった病院に受診します。そのため病棟は常に人があふれ、まさに野戦病院といえる状態にショックを受けました。しかしそこで働く先生や看護師の方々が一人でも多くの命を救おうと奔走なさっている姿に医療の原点を見ました。それは国が変わろうと変わるものではなく、私も忘れないよう心掛けなければならないと気が引き締まりました。

今回の実習中は、現地の先生や学生とのコミュニケーションは英語で行われ、改めて英語学習の必要性を感じました。日本語で話されたら簡単に分かるようなことでも、英語になった途端に理解するのに時間がかかり、反応にワンテンポ遅れてしまい非常に悔しい思いをしました。また自身のコミュニケーション能力の不足を痛感しました。医療を円滑に行うために患者さんとの関係を構築し、スタッフ同士の意志の疎通を行うことは必須となります。今回を機に自分の弱点を知ることができたことが大きな収穫となりました。

初めての留学ということで不安な面もありましたが、現地の先生と学生が親切に対応してくださり、無事留学を行うことができました。現地の人たちとふれあい、文化に接することで自分の中にある多様性が広がったことも、留学に行って本当に良かったと思えることの一つです。

この度は愛媛大学の先生方や国際化推進室の方々、同窓会の皆様のご尽力により留学を行うことができました。このような機会を与えてくださったこと重ねて御礼申し上げます。

■ 三田　佳夏子（６年生）

（右端）

私は５月19日から２週間、中国医科大学の小児科と婦人科で臨床実習をさせて頂きました。小児科では日本への留学経験のある先生に指導して頂きながら、主に病棟実習を行いました。現在は一人っ子政策でこそありませんが、両親や祖父母が非常に子供を大切にしている様子が見受けられ、中国の社会情勢や教育の環境などについても考えることができました。婦人科では、主に手術の見学をさせて頂きました。Commonから希少疾患まで幅広い症例に対する手術を毎日10件以上こなしていることに驚き、最高学年の医学生が日本の研修医のように手術に参加していることにまた驚きました。

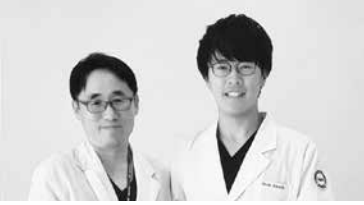
中国医科大学では英語や日本語の授業を行うコースもあるとのことで、複数の先生が日本語でも話しかけてくださいました。実習中は基本的に英語での会話だったので最初は自分の英語力で通用するのかと不安に思いましたが、次第に自分からも質問できるようになり、時に漢字も交えながらコミュニケーションをとることが楽しくなりました。しかし医学用語などの語彙力はまだまだ不足していると感じ、今後は意識的に英語表現を学んでいきたいと思います。

今回の臨床実習の際には、以前愛媛大学に留学した学生たちがとても丁寧に歓迎してくれました。学生たちやご指導してくださった先生方のおかげで、中国の医療体制のみならず、歴史や社会的背景、食や音楽の文化など様々なことに触れることができました。非常に有意義で、楽しい２週間を過ごすことができました。

最後になりましたが、今回が初めてとなる中国医科大学への留学にあたりご支援・ご尽力頂きました先生方、国際化推進室の皆様、同窓会の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

■ 工藤　聡（６年生）

（右側）



私は2019年６月３日から６月14日まで韓国の春川にある江原大学病院で、循環器内科、小児科をそれぞれ一週間ずつ回らせていただきました。循環器内科では心エコー、PCI、カテーテルアブレーションの手技の見学や、英語による講義、回診などがありました。一週間の中で緊急のPCIなどもあり、緊張感のある中で実習でき、かなり刺激的でした。小児科では、抗菌薬、アレルギーといったテーマの英語での講義や外来見学、陰圧室やNICUの見学、感染防護服の着脱体験を行いました。日本の臨床実習では体験できなかった内容も経験でき、大変有意義な時間を過ごすことができました。また、韓国の観光や現地の方との交流を通じて、食文化や言語、マナーなども学ぶことができ見識を深めることができました。

韓国の医学生はとても英語が堪能で、英語での症例プレゼンテーション、英語で書かれた医学書なども全く苦にしていませんでした。私は、留学前に少し医学英語を勉強しましたが、付け焼刃ではなかなかうまくディスカッションなどに参加できずとてももどかしい思いをしました。そんな中でも各科の先生方や学生がサポートしてくださり、２週間のうちの後半では何とか必死に参加できたのではないかなと思います。これからの学習の中で、医学英語にも積極的に触れていく必要があることを痛感しました。また、後輩たちや同期の学生にも今回の経験を伝えていきたいと思います。最後になりましたが、韓国で臨床実習を行うという恵まれた機会を得られたのは、同窓会の方々のご支援あってのことだと深く感謝しております。そして、このプログラムにご尽力くださった国際化推進室の方々に心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

■ 小野田　杏奈（６年生）

（左から３番目）

この度、中国の大連医科大学での臨床実習に行ってまいりました。大連は、国遼寧省の南部に位置し、人口は約600万人と大都市です。初日に大連を目の当たりにしましたが、とても都会で急速に発展している都市という印象でした。車通りは多く、ここ最近で急激に車の利用者が増えたため、それに見合う駐車場の数が追い付いてないそうです。確かに、道路のわきに駐車している車がたくさんありました。

次に、大連医科大学附属病院での実習について。まず、大連医科大学の附属病院は、いくつかに分かれています。愛媛大学の附属病院は大学の真隣りに一つあるのみです。しかし中国では、患者さんの数が多いため、附属病院をいくつかに分ける必要があるとのことでした。

実習中、中国人学生が、先生の監視なしに、術後の処置を行っている場面を目の当たりにしました。私は、この光景に驚き、上野先生に聞くと、「中国は患者さんが多すぎて、学生の力を借りないと間に合わない。何かあれば、その学生の上についている先生の責任になるから指導は念入りに行っている。」とのことでした。

また、中国では、クリニックは少なく、信頼度は低いとされており、大学病院といったような、大きな病院に患者さんが集まる傾向にあります。その結果、土日も外来をしています。

このように、日本と中国は同じアジアで、ご近所であるにも関わらず、昔からの社会制度の違い、規模の違いから、医療の現場は大きく異なるということが分かりました。中国は、たくさんの人にあふれていますが、一人ひとり違って、みんな素敵な人たちでした。

最後に、今回の研修を支援してくださったたくさんの方々に感謝の意を表したいと思います。大変ありがとうございました。

■ 羽田　拓史（６年生）

（右奥から２番目）

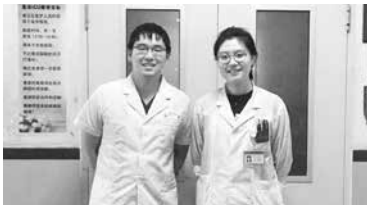
私は６月17～28日の期間で大連医科大学の臨床実習に参加させて頂きました。そこでは様々な経験を得ることが出来ました。１つは海外の方とのコミュニケーションです。実習では英語を用いて会話をしました。しかし私は臨床実習で英語しか使えない状況でコミュニケーションを取ることは初めてであったため、うまく自分の考えを伝えることができませんでした。また日常生活においても中国では当たり前ながら公用語は中国語であり、日本語や英語はあまり通じません。この実習を通じて、自分の言語能力があまりない状況下で自分の考えやしたいことを伝えるという経験を得ることが出来ました。

もう一つは中国と日本の病院の違いについてです。日本の病院と比較して中国の病院では外来患者が多く、診察室の前の通路では通勤ラッシュのような人の多さでした。また診察室の中は日本では１つの診察室に医師、患者、患者の家族、学生を含めて多くても６人程度しかいませんが、中国では他の人の診察中でも別の患者さんが診察室に入ってきたり、同時に家族の方も入ってくるため、１つの診察室に15人いることはよくありました。また学生の臨床実習についてもH.pyloriの検査である尿素呼気試験は学生のみで行われていました。検査の受付、試薬の投与、検査の実施、検査結果の報告まで全て行われており、日本との臨床実習のやり方の違いを実感しました。

大連医科大学での臨床実習を通じて、海外の人とコミュニケーションを取る機会を多く得ることが出来ました。2020年には東京オリンピックが開催されるため、外国の方を診察する機会が増えると考えられます。この経験を活かして、自分の考えを外国の方に伝える能力を高め、将来は日本以外でも診療ができる医師になりたいと思います。

■ 羽生　敬（６年生）

（左側）



2019年６月15日から６月29日の２週間、中国は大連の大連医科大学へ臨床実習に行く機会をいただきました。大連医科大学附属病院では、救急部で実習して参りました。

短い期間でしたが、救急部、ICUにおける患者さんの生命維持や処置、回診、カンファレンス、講義など大連医科大学附属病院の先生方は私を迎え入れてくださいました。具体的には、敗血症の患者さんのバイタルの確認とその病態を把握すること、イレウスの患者さんの腹部エコーの見方や取り方、静脈へカテーテルを挿入する手技を学びました。

今回の実習では、中国と日本の文化の違いも学ぶことができました。中国では1970年代から2016年まで実施されたいわゆる「一人っ子政策」の影響もあり、子供のことを思う気持ちが強く、家族が病気の子供をとても心配し治療にも積極的に関りを持つと教えていただきました。また、日本と異なり、総合病院で治療を受けたがる国民性があり、大連医科大学附属病院もとても混雑しておりました。このような、文化の違いを理解することで、来日された中国人の患者さんに対しても、適切な医療を提供することができると思います。

私と、指導してくださった先生とのコミュニケーションは英語が主体でした。愛媛大学で積極的に学んできた英語の知識、能力を活かして、英語で先生に質問したり、先生からの説明に対して理解したりすることができました。この経験は、今後のグローバル社会において医療を提供することの自信にもつながりました。

最後になりますが、今回の実習の機会を頂戴するにあたりまして、ご支援・ご尽力いただきました先生方、国際化推進室の皆様、ご支援いただいた同窓会の皆様に心より御礼申し上げます。この２週間で感じたことや得たことを活かし、より良い医療者となれるよう努めたいと思います。

■ 森迫　ゆり子（６年生）

（中央）

2019年６月に中国の大連医科大学へ２週間の臨床研修へ行かせていただきました。到着するや否や、大連の大都会ぶりに圧倒されます。高いビル、広い公園。果たして私は中国に来たのだろうか、正直そんな感想を持ちました。

実習は産婦人科で行いました。医療設備、診療システム、プライバシー。全てが日本とはまるで違っていました。産婦人科の外来は男子禁制。自身のカルテを持った患者が診療開始前から大勢集まり、診察室には家族以外の人も入室します。多い時にはなんと13人もの人がすぐ隣で他人の問診を聞いています。診察室の奥には内診台があり、医師は数人の内診を次々に行います。ここには日本のような自動内診台や目隠しのカーテンなどはありません。自身で台の上に上がり、採取した検体は患者の手で検査部へと運ばれます。また、低リスクの子宮頸部円錐切除術は外来の一角で簡易的な衛生環境のもと行われ、10分以内に全ての処置が終了します。一方、手術は子宮筋腫核出術、単純子宮全摘術、帝王切開などを見学しましたが日本と大きく変わったところはないように感じました。少し古びた病棟の中で、産科病棟だけが、飛び抜けて綺麗だったのは中国が一人っ子政策をしていたからでしょうか。

私の中で近くて遠い国だった中国で、歓迎してもらったこと、友達ができたこと、また、学生という立場で留学させてもらえたことはかけがえのない経験でした。２週間、日本ではあまり考えない、生活環境や育った環境、自分や将来について考える良い機会となりました。

最後になりましたが、今回の留学にご支援とご尽力くださいました、先生方、国際推進室の皆様、同窓会の皆様に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

■ 伊吹　優里（６年生）

（右から２番目）

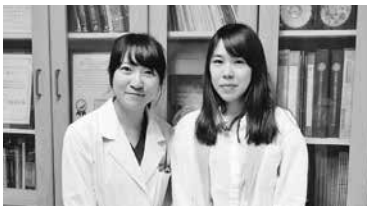
私は2019年６月17日から２週間、台湾の高雄市にある高雄医学大学へ派遣して頂き、血液腫瘍内科で実習をしました。外来や骨髄生検の見学、病棟回診の際には多くの先生、コメディカルの方にお世話になりました。みなさんに温かく迎えて頂き、短い期間で少しでも多くのことを学べるよう指導してくださったおかげで、とても充実した実習をすることができました。先生のご配慮で血液腫瘍内科とつながりのある緩和ケア、東洋医学、小児血液の分野も見学させて頂き、台湾の医療現場をより深く知ることができたように思います。

４回生から医学英語の学習を始め、約１年前にノルウェーで１カ月間の臨床実習を経験しました。今回は実習中に担当の患者さんを当ててくださり、先生と病態や治療方針についてディスカッションする機会を多く頂きました。その中で前回の留学と比較し成長を感じた部分もあれば、今後の課題だと感じる部分もあり大変良い刺激を受けました。

また、お世話をしてくれた高雄医学大学の学生との交流は一生忘れることのない思い出になりました。日本語を熱心に勉強しておられ、食事や観光の際には日本語で会話をすることもありました。思いやり、優しさ、温かさに溢れた学生と出会い、こんなにも楽しい２週間を送れるとは思ってもいませんでした。海外の医学生と交流する貴重な機会を通じて、“学ぶ”ということに対するモチベーションがより一層高まったように思います。

最後になりましたが、留学に当たりご尽力頂きました先生方、国際化推進室の皆様、ご支援いただいた同窓会の皆様に感謝申し上げます。この経験を糧に、良い医師になれるよう日々努力して参りたいと思います。ありがとうございました。

■ 岩下　晶穂（６年生）


（左側）

私は2019年６月17日～28日の２週間、台湾の高雄医学大学の内分泌・代謝科において海外医学研修をさせていただきました。

外来業務では外来診療や、糖尿病患者に対する栄養指導、眼底検査やABIなどの検査の見学をさせていただきました。病棟業務では入院患者さんの入院時の初期対応やその後の管理について聞いたり、他科からのコンサルテーションを受けて入院患者さんに話を聞きに行くところに同伴させていただいたりしました。内分泌科に入院している患者さんは糖尿病のコントロール不良による緊急疾患で入院している方がほとんどで数は多くなく、外来と他科からのコンサルテーションが主な業務ということでしたが、それだけに内分泌・代謝科の疾患の頻度の高さや実生活との密接な結びつきを実感しました。

病院の外に出れば台湾の方々の温かさに触れ、感動しました。現地の学生とも深く交流でき、かけがえのない仲間を作ることができました。日本語の勉強をしている学生もいましたが、多くの学生は英語が上手で日常会話でも実習に関する会話でもほぼ全く支障がないほどだったのでこれが海外の基準なのかと驚かされ、自分もこれからも継続して英語を勉強していかなければと痛感しました。

最後にはなりましたが、高雄医学大学との初の交換留学生として海外医学研修をする機会をいただけたことを非常に光栄に思っております。そして、このような貴重な経験ができたのも皆様のご支援あってのことと深く感謝しております。また、海外研修を行うにあたりご尽力いただきました国際化推進室の皆様、英語講座を開いてくださった熊木先生に深く感謝申し上げます。これからも高雄医学大学と愛媛大学の交流が末永く続いていくことを切に願っております。

■ 竹本　隼（６年生）

（右から３番目）

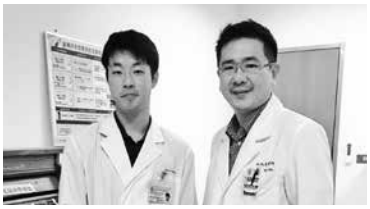
2019年６月17日からの２週間、台湾の高雄医学大学にて小児科の臨床実習をさせていただきました。高雄医学大学との交換留学は今年度が初回だったため、勝手が分からず不安なことも多かったですが、日本好きな現地の学生が出発前から連絡をくれ、空港への迎えや学校の案内、寮の部屋の掃除など、何から何までサポートしてくれてとても心強かったです。

病院実習では小児血液の先生に付かせていただき、現地の実習生と一緒に外来や回診を中心に見学させていただきました。先生は患者さん一人一人の状態を説明してくださり、また私たちの疑問にも丁寧に答えてくださりました。外来では医師も患者も実習生もかなり自由で、タピオカを飲みながら時に診察用のベッドに腰掛けて話す医師の姿や、診察室に自由に出入りして医師にあいさつしたり雑談したりしはじめる患者、分からないことは何でもその場でiPhoneで調べられ、患者とも好きに話していい実習生など、日本との文化の違いに驚きました。朝が早い分昼休みが長く、みんなで外にランチを食べに行ってその後みんなで昼寝をする生活も台湾ならではで楽しかったです。

土日や実習後などは現地の学生がごはん・海・山などいろんな所へ連れて行ってくれました。あちらの部活にも混ぜてもらい、２週間という短い間でしたが非常に充実した濃い日々を過ごすことができました。たくさんの親切な先生や学生、街の人との交流や思い出は今回の留学で得られたかけがえのない財産になりました。この貴重な経験を今後の医師人生に活かせるよう、さらに勉強や実習に励んでいきたいと感じました。

最後になりましたが、今回の留学にあたりお世話になりました先生方、国際化推進室の方々、ご支援いただいた同窓会や両親に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

■ 永山　正和（６年生）


（左側）

2019年６月15日から30日まで２週間の間、台湾第二の都市にある高雄医学大学で実習を行いました。高雄医学大学には学生が5000人ほどおり、病院は22階建てととても規模の大きい大学です。

私は２週間、眼科学講座で実習を行い、外来見学、手術見学、豚眼実習、カンファレンスなどを体験しました。実習は２週間を通じて一人の担当の先生につく形で行われ、外来見学では細隙灯顕微鏡のモニターを指しながら患者さんの目の状態がどうであるか、手術実習では手術後にどのような流れで手術を行ったかを英語で説明してもらいながら実習を受けました。専門用語や略語などに苦しめられましたが、先生や一緒に見学している学生に助けてもらいながら何とか理解することができました。実習を通じて一番印象に残っているのは、交通事故による角膜外傷の手術で、救急部から転科された後、スムーズに手術が行われる様子にはとても驚きました。

高雄医学大学には国外からの学生が入学してきている上、私と同じ実習期間に、マレーシアとフィリピンから学生が留学に来ており国際色豊かな環境で学ぶことができました。彼らから文化の違いや医学実習の違い、また医学英語の勉強法などを教えてもらいました。また実習とは別に、留学中を通じてサポートしてくれたホストスチューデントたちは皆日本語を勉強中で、日本に興味を持ち私たちに大変親切にしてくれました。おかげで台湾の自然、食、観光地を満喫できました。こうしたさまざまな学生との出会いと得られた経験を糧に今後よりよい医療人になっていきます。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださいました愛媛大学の先生方、国際化推進室の方々、同窓会の皆様に心より感謝を申し上げます。

医学祭を終えて

第43回愛媛大学医学祭実行委員長　**安井　悠真**

５月18日、19日に第43回愛媛大学医学祭を開催させていただきました。今回の開催につきまして、多くの方にご協力をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

今年の医学祭のテーマは「prestige」といたしました。この医学祭を通して、仲間との協働作業や地域の方々との交流の中で、チームワーク力やコミュニケーション力を磨くことができ、一流の医療従事者になるために必要なものをわずかですが学ぶことができたと思います。

医学祭当日は思わぬ強風にみまわれました。しかし、バザーのテントが風で飛ばされそうになりながらも、周辺の木々に紐で括りつけたり、テントを半分だけ折りたたんだりすることで大きな事故もなく医学祭を行うことができました。

ステージ企画では軽音部や吹奏楽の演奏、ダンス部のダンス、空手部や合気道部の演武など、この日のために一生懸命練習してきたサークルの輝かしい姿にステージは賑わっていました。その他、「和牛」「ひめころん」によるゲストライブや愛媛大学本学の方々によるアカペラライブやお笑いライブ、各サークルによるバザーやフリーマーケットなどが催され、数多くの方々に医学祭を楽しんでいただけたのではないでしょうか。

また、講演会では愛媛大学救急医学講座の佐藤格夫教授に「ドクターヘリ !! 救急医療への貢献と災害時のドクターヘリの役割」をご講演していただきました。ドクターヘリの運航にはチーム連携、コミュニケーションを円滑に行うことが大切だということ、災害が発生した時に、ドクターヘリがどのような体制で被災地へ飛んでいくのかということを学ばせていただきました。

教職員の皆様や諸先輩方、地域住民の方々など本当に多くの方々に支えてもらい、医学祭を無事終えることができました。医学祭を通して人との連携の重要性を肌で感じることができ、私自身にとってとても貴重な体験をさせていただきました。この経験を生かして医学祭が発展していくために後輩を支えていくとともに良き医療人となるための糧にしていきたいと思います。

最後に、第43回愛媛大学医学祭を開催するにあたり、協力してくださった関係者の皆様に実行委員一同より厚く御礼申し上げます。

愛媛大学校友会をご存じですか？

愛媛大学校友会はすべての学部の垣根を越えて組織された団体で、同窓生をはじめ、学生及びその保護者、現職及び退職の教職員を会員として、平成 16 年に設立されました。

校友会は、①学生サークルへの援助　②就職活動旅費の支援　③留学渡航費の支援　④学生図書の寄贈　⑤入学生・卒業生への記念品贈呈　⑥子規俳句カレンダーの作成　⑦新社会人の歓迎会など、主に学生支援事業を行っています。

また、同窓生が主体となって組織された首都圏支部・近畿支部・中国支部では、講演会や懇親会を開催し、皆さんの参加をお待ちしています。

同窓生の皆さんは既に校友会員ですが、会員情報のご登録がないと大学の近況や校友会報の送付、校友会イベントのご案内が出来ません。是非、下記によりご登録いただき、校友会活動にご参加くださいますようお願いいたします。

EUAA
Ehime University Alumni Association

＜愛媛大学校友会事務局＞　http://koyu.ehime-u.jp/
〒 790-8577　松山市文京町３番　校友会館２Ｆ
Tel 089-927-8610　E-mail：office@koyu.ehime-u.jp

同期会報告

4期生同期会 報告

平成30年９月23日に愛媛大学医学部４期生同期会が、道後の大和屋本店で開催された。最年少の昭和33年３月生まれの者が還暦を迎えた後のタイミングとした。６年ぶりの再開の場には38名の仲間が参集し、恩師である三木吉治 元学長・皮膚科学名誉教授が遠路ご参加くださった。午前中には親睦ゴルフを行い、大野憲一先生が生涯ベストスコアーをたたき出した。大和屋能舞台での記念撮影に続いて懇親会を行った。飯尾昭三先生の開会宣言に続き三木吉治先生のスピーチ、乾杯の御発声により開宴となった。テーブル毎に近況や「こばなし」が披露された。仕事の形態に新しい針路を導入した人、超有名人と３度目の結婚をした人など興味深い話しあり、また心停止から生還した人、大病を克服した人たちの快癒の様子をうかがって安堵したり、一同真剣に聞き入り、笑いあり涙ありの時間を楽しみつつ大和屋水野支配人肝いりの献立に舌鼓を打った。飯尾智恵先生の中締めご挨拶の後、31名の酔漢がラウンジでの二次会に突入した。出席できなかった人たちの近況を報告し合い、各人とっておきの話しや「秘部」に触れる内容も公開し合って学生時代から現在、そして未来に至るまでの時空を共有できた。ある者は終電時間を気にしながら、ある者は睡魔と闘いながら力の限り語り合い、22時過ぎまで盛り上がった。近い将来の再会を誓い合って散会となった。

５年後の愛媛大学医学部創設50周年に向け、４期生も尽力いたします。

愛媛大学医学部の同窓生の皆様、今後とも多士済々の４期生の応援をよろしくお願いいたします。

（文責　八杉　巧）

11期生同期会 報告

平成30年11月３日（土・文化の日）、４回目の同窓会を大和屋本店にて開催致しました。昭和58年入学または平成元年卒業または途中一緒に学んだ人たち、総勢50名が各地から集まりました。初めに井村真里さんを悼み黙祷のあと、中城有喜さん、中田達広さん迷コンビの司会進行で、羽藤直人教授の挨拶と乾杯により開宴。途中出席者全員のショートスピーチで近況報告や思い出話に耳を傾けました。今回のスライドショーは安部俊吾さん撮影の卒業旅行シリーズ。次回はもっといろいろな写真を集めて準備しておきますね。

最後は小野里康博さんによる閉会の挨拶「次は群馬に来てください」とのことで初の県外同窓会が開催されそうです。

２次会はカラオケファーストでしたがカラオケ全くなしでおしゃべりに花が咲いているうちに日付が変わっていました。元気なおっさんずは３次会へと大街道のアーケードを闊歩しながら消えていき･･･。あれれ､30年前のデジャブ？

（文責　樋口志保）

20期生同期会 報告

「いつかしよう」は永久に来ない。

１人の男性が立ち上がりました。大阪にいる彼は、なかなか腰を上げない愛媛ののんびり気候に染まった我々を、この数年粘り強く勢いよく背を叩き続けました。丁度１年前に開催が決定した、卒後20年目の平成最後「20期生同窓会」は彼のお陰です。

愛媛大学附属病院と松山日赤病院にいた３＋１（入れて頂きました）人が幹事となり、まず消息を尋ねるためにSNSグループを作りました。「６人辿れば世界中の人と知り合える」との言葉がありますが、卒業以来の同期生とも様々なSNSを通じて連絡を取ることができました。一度連絡が取れてしまえば皆そこは学生のノリ。有無を言わさず出席を強要された人がいなかったか心配です。

最終的に2019年１月13日参加予定者は68名となり、当日欠席者も３名に留まりました。無事に同窓会本部よりの同窓会費案内も未納対象者へ渡すことができ、受付幹事一同安堵いたしております。まず集合写真を撮り、開宴の挨拶と鬼籍に入りました２名の同期生に対し黙祷を捧げたのち、お酒と中華料理を片手に待ってましたと歓談が始まりました。ポリクリ班で集まったり部活仲間で飲み交わしたり、皆近況を伝え合いながら公私ともに様々な問題を笑いあったり。２時間では足りずに２次会、３次会、更には締めのラーメン隊も出来たとか。連休の中日に開催したため、翌日には学生時代を過ごした愛媛を家族で楽しんで帰った人もいた模様です。

10年後の再会を期待する言葉がSNS上には並んでいます。次の幹事は一応決まりましたが、約束がアルコールとともに代謝されていないか少し心配です。しかしその時はその時で、「いつか」を「今この時」とする誰かがまた動き始めることでしょう。今回も「今」がその時だったのだと思える同窓会でした。

同窓会本部より金銭的援助を頂きましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。そして愛媛大学と医学部20期生の今後のご発展とご健勝を祈念して、今回の同窓会報告とさせて頂きます。

（文責　藤井園子）

8期生同期会 報告

愛媛大学医学部８期生の同期会を令和元年７月20日に国際ホテル松山で開催しました。

当日は蒸し暑い中を北は千葉県から南は沖縄県まで合計25人が集まり、金澤慶治会長から開会の挨拶と同窓会費未納者への納入のお願いを行い、事務的な連絡のあと、懇親会を始めました。

沖縄から参加の２人（夫婦）のうち１人は現在は慶應義塾大学で研究していると報告があり会場を驚かせました。熊本からは大河ドラマいだてんの話題があり、一方で倉敷市からは昨年の豪雨災害の報告もありました。

愛媛県内でもそれぞれの診療科で活躍している人ばかりで、一通り近況報告を行い仕事に関連した話も盛り上がりましたが、アルコールが進むと思い出すのは学生時代、校舎やグランドを思い浮かべながら懐かしい話が止まりませんでした。

年長者はそろそろ還暦にさしかかっており、お互いの体のことも気になるところです。何事も同級生で助け合って、これからも元気に頑張ろうと誓い合いました。

いろいろな立場での縦横の繋がりがありますが、やはり同級生はいいものです。そのベースとなるのは同窓会本部です。ますますの発展を祈念いたします。

またいつまでも誇れる母校であり続けて欲しいとみんなで思いました。

（文責　東野　博）

同期会報告

同窓会総会（8/3/2019）の終了後に行われた同期会（１期生、２期生、26期生）

１期生同期会 報告

薬師神同窓会長の肝いりで、愛媛大学医学部の全体同窓会が、毎年８月第一週の土曜日、８月３日午後に開催されることが決定し、記念すべき第一回が伊予鉄会館にて挙行された。今年度は一期生にとっては、すべての同期生が65歳越えとなり、愛媛大学医学部および病院には現役の同期生は一人もいなくなる、“全員 OB”の節目に当たる。それに間に合うようにスタートさせたこの粋な企画は、薬師神会長や関係者の計らいによるものだと察するが、一期生としても是非末永く参画していきたいと思っている。私からの案内不足も影響して、一期生の参加は10名弱と少なくはあったものの、東京や大阪・広島・香川など県外から駆けつけてくれたのはうれしかった。全国で活躍中の後輩同窓生のマインド溢れる講演にも、愛校心をくすぐられると共に、大変心強く感じた次第である。総会後の懇親会は、卒業年度など関係ない、まさに同窓生の繋がりを肌で感じることができた。

現在まで一期生の死亡は一人も確認されておらず、各々ペースのバラツキはあっても、全国各地で活躍中である。同窓会後、街に繰り出したが、飲む勢いは衰えておらず、また翌日の猛暑の中のゴルフも、熱中症を心配する必要は微塵もなく、パワフルなスイングでOBの数？を競い合っていた。本格的な少子高齢化時代を迎え、80・90歳まで生存することが当たり前の中で、我が国の担い手として「元気高齢者」の活躍が期待されている今日、一期生はその見本となるべく責務を感じないといけない。「老兵は静かに去る」が美徳であった時代は終わった！　後輩に「老害」と言われながらも、愛媛大学医学部および同窓会の発展に、命の限り！もの申して参りたい。その点どうかよろしく！！

（文責　櫃本真聿）

２期生同期会 報告

令和元年８月３日に「二期生同期会」が炙楽で開催され、県内はもとより県外からも参加が有り、合計23人で賑やかに行われました。64歳から長老の三好先生73歳まで様々な年齢層が集まりました。会の前に行われた同窓会講演会（写真左）では名古屋市立大学の村上信五先生が館ひろしやジャニーズ村上信五とのツーショット写真を披露し、研究内容（ベル麻痺へのヘルペス関与を世界初で証明）よりも受けていました。令和２年も、同窓会総会開催日19時からの再会を約束しました。

（文責　松田正司）

26期生同期会 報告

2019年（令和元年）８月３日、第35回愛媛大学医学部同窓会通常総会に合わせて26期生の同期会を行いました。同期会に先立ちいよてつ会館で行われた通常総会の記念講演会では、現在アメリカで医師として働いている26期生の伊藤誠治先生が講演をしました。愛媛での懐かしい写真を交えつつ、これまでの経歴・現在の仕事内容など非常に分かりやすく興味深い講演でした。総会後の懇親会も盛り上がりましたが26期生同期会のため大街道へ移動。トルコ料理店でベリーダンスショーを見学しながら昔話に花を咲かせました。二次会は居酒屋へ。伊藤誠治先生を囲んで「この中で変わらないのは？」「この中で一番変わったのは？」などの話題で大いに盛り上がりました。休みを取って県外から飛行機で来てくれた者、仕事終わりで大急ぎで駆け付けてくれた者、急遽仕事の都合がつきドタキャンならぬ飛び入り参加してくれた者など、のべ20名の懐かしい面々が集まりました。遠方からの参加者からは特に愛媛の参加者が少ないとの指摘がありました。こちらをご覧の26期生の皆様、次回は是非ご参加下さい。

（文責　鍋加浩明）

支部紹介

第8回、第9回近畿支部総会 報告

第８回、第９回近畿支部総会は、それぞれ2017年11月４日、2018年６月８日に大阪市のプリーゼプラザにて開催されました。第８回には67名、第９回には68名の参加者があり盛況でした。

第８回総会の記念講演は京都大学医学部附属病院緩和ケアセンターの 谷向仁先生にお願いし、「がん医療における心のケア～あなたが、家族ががんになったら・・・」と題して行われ、いよいよ必要性が増してきている心のケアについてお話しいただきました。

第９回総会では「泌尿器科における最新治療について」という演題で、神戸大学医学部付属病院泌尿器科准教授　中野雄造先生にご講演いただき、ますます広がる治療の選択肢について解説していただきました。第8回総会には中国支部代表の下原康彰先生の呉市からの参加もあり、中国支部の現状についてご報告いただきました。

総会後は懇親会になだれ込み、同期生、クラブのOB 会、また日頃の診療上の情報交換と、わいわいガヤガヤとひと時を楽しみ解散、三々五々夜の街に繰り出したひとも多かったようです。

このように近畿支部では毎回記念講演として最新の医療事情、そして明日からの診療にすぐに役立つ講演を開催しており好評をいただいておりますが、これも当番幹事の先生方のご苦労があります。今回も大変お世話になりました。

さて、今回も柳原名誉教授が出席され愛媛大学校友会（愛媛大学全体の同窓会組織）近畿支部についてお話しいただきました。今年度の校友会近畿支部総会は2019年６月８日に開催され、医学部より柳原先生を含めて６名の参加がありました。全体として30名程度の参加者でしたが今回医学部から多数の参加があったことをみなさん喜んでおられました。楽しい講演もあり、他学部の同窓との交流も新鮮な気分で楽しい時を過ごしました。これからも積極的に参加していくべきだと感じたところでした。

近畿支部は近畿一円に在職、あるいは居住している同窓生で構成されています。毎年多くの卒業生が研修で近畿地方に来ておりますが、個人情報保護の壁は厚くなかなか動向が把握できない状況です。近畿にお住いの皆さん、是非ご連絡下さい。また近畿以外の方も近畿支部って何かおもしろそうと思われたら総会に来られることは大歓迎ですのでご連絡お待ちしております。

（文責　1期生　朴　信正　park618424@sunny.ocn.ne.jp）

支部紹介

第17回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会 報告

今年も、恒例の１月第４土曜日の19時より、アルカディア市ヶ谷で開催。
母校から、お二人の教授をお招き致しました。
お一人は、愛媛大学大学院医学系研究科産婦人科・地域小児・周産期学講座教授　松原圭一先生。「妊娠高血圧症症候群の病態と臨床、そして、愛媛大学の現状について」をお話し頂き、The Lancetにfirst authorで愛媛大学から載せる力に、改めて母校の講師力の凄さを認識致しました。お二人目は、救急航空医療学講座教授　佐藤格夫先生。「愛媛県におけるドクターヘリ運航と救急医療」をスマートに凄みを持ってお話し頂きました。流石、京都大学で看板になっておられた実力を実感致しました。ドクターヘリでは、宇和島－松山間が23分だそうです。
そして、いつもの歓談。束の間でしたが、楽しい時間でした。このクオリティを関東在住の若手同門医師に届ける企画も増やして参ります。また、東日本支部では、事務局運営に会員管理ソフトを導入予定です。関心ある支部会はご連絡下さい。

（文責　9期生　酒向　正春）

第９回愛媛大学医学部同窓会中国支部総会 報告

令和元年５月25日、ホテルグランヴィア岡山で第９回中国支部総会が開催されました。この会は２年毎に広島、岡山で交互に開催しており、今回は岡山において４回目の開催となりました。参加者は１期生から19期生まで24名。支部代表下原康彰先生（１期生）の挨拶で始まり、岡山市出身の長櫓巧先生（済生会西条医療福祉センター長、前愛媛大学医学部麻酔・周術期学教授）に「愛媛での44年間 －痛みの治療の変遷－」というタイトルで記念講演を賜りました。「痛みの医療の今昔」に始まり、「慢性痛の機序」、「痛みに対する考えの変遷」など先生がライフワークにされていた「痛み」のお話を分かりやすく解説していただきました。
懇親会ではそれぞれ近況報告を行いました。学生時代や最近の身辺の話題が飛び交い楽しい時間を過ごすことができました。同じ地域の同期生、そして先輩、後輩の先生方との交流はそれぞれの地域における医療ネットワーク構築に大いに役立っていると感じられました。その後ホテル最上階のラウンジに場所を移し、懐かしい話題で夜遅くまで盛り上がりました。
この会は中国地方におられる先生方に案内を出していますが、広島、岡山での開催のためか両県以外の参加者はほとんどありません。山口、島根、鳥取の先生方も同期の先生たちと連絡を取り合うなどして参加いただけることを願っています。次回は２年後（令和３年）に広島で開催予定です。多くの先生方の参加をお待ちしています。

（文責　田辺　耕三）

第16回愛媛大学医学部同窓会九州支部総会 報告

皆さんお元気ですか。今年も愛媛大学医学部九州支部同窓会を７月27日ホテル日航福岡にて行いました。
今年の同窓会は、17名でした。福岡県８名、熊本県３名、長崎県２名、大分県２名、山口県１名、わざわざ沖縄から参加していただきました久高先生（９期生）をはじめ、１期生から21期生まで、お忙しい中お集まりいただきありがとうございました。皆元気で和気藹々とした雰囲気でした。
今回の講演は、『**脳神経外科　最近の話題**』の演題で現在下関市立病院脳神経外科勤務の中村隆治先生（５期生）にお願いしました。
その後、写真撮影、懇親会となり近況報告も交えながら会食を行いました。その中で、NHK 大河ドラマ「いだてん」の金栗四三の孫である酒井先生（８期生）のテレビの裏話などもされました。無事同窓会は終了し、ホテル内で二次会を行い来年の再会を誓いました。

来年は令和２年７月18日(土)18時30分よりホテル日航福岡にて開催予定です。
九州在住や九州に赴任された先生がおられましたら一人でも多く出席していただけるようご理解ご協力お願いします。
愛大の各医局の先生で九州出身の方の参加も歓迎します。また研修医で九州勤務の方も参加よろしくお願いします。

事務局　　すみい婦人科クリニック　　澄井　敬成（８期生）sumiic@k9.dion.ne.jp
九州支部長　角整形外科医院　　角　　典洋（２期生）sumi-clinic@mx2.tiki.ne.jp

（文責　角　典洋）

愛媛大学医学部同窓会　東海・中部支部の設立

愛媛大学医学部は昭和48年に新設医大・医学部として設立され、まもなく設立50周年を迎えます。遅ればせながら、東海・中部同窓会支部を設立しましたので報告させていただきます。
愛媛大学医学部の卒業生は、愛知県ではすでに100名を超え、岐阜・三重を含めた東海3県には約180名、静岡、新潟、長野、富山、石川、福井を含めた中部9県では約250名が各地で活躍されています。昨年、本誌から東海・中部地区の卒業生に同窓会支部設立のメッセージを送りました。それ以後、手分けしてメールやFacebook、Line 等で東海・中部支部の設立を呼びかけました。そして、９月23日、名古屋市立大学の臨床講義室で設立集会を開催し、規約の制定や組織編成を行いました。愛媛大学同窓会幹事の熊木天児先生（Ｈ７年卒：愛知県出身）も急遽駆けつけてくれ、また、関東支部や近畿支部、中国支部、九州支部の規約や運営方針も参考にさせていただき、大変スムーズに運びましたこと改めて御礼申し上げます。役員は、ご本人からまだ承諾いただいていない方もおられますが下記のように決まり、来年２月１日(土)のオリンピックイヤーに名古屋で第１回の東海・中部支部同窓会を開催することが決まりました。詳細は12月末日までに大学同窓会 HPおよび愛大同窓会 FB グループにアナウンスします。薬師神同窓会会長にも参加していただきますので、東海・中部在住の皆さんには、万難を排して参加いただけますよう、よろしくお願いいたします。

設立集会後は名市大近くにある「鈴喜」で歓談しました。「鈴喜」はかっては松岡修造や錦織 圭などプロテニスプレヤーが訪れたことのある鳥料理専門店です。気楽でお値打ですので、是非、名古屋にお越しの際は立ち寄ってください。久しぶりに同級生や30歳も年齢差のある後輩と歓談しましたが、サークルや松山、愛媛の話題になると年齢や時の流れを忘れてしまいました。皆さん、2020年２月１日、よろしく！
追伸：東海・中部在住の皆様、Gmailなどメールアドレスを事務局の大石久史 <ehimemed.tokaichubu01@gmail.com >まで、送付いただけましたら幸いです。今後の連絡先・問い合わせ先として活用したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

（文責　2期生　村上　信五）

愛媛大学医学部同窓会　東海・中部支部　役員
会　　長：村上信五(S55)
副 会 長：富永真琴(S59)、宮島雄二(S59)
事務局長：大石久史(Ｈ８)
常任幹事：総会担当　　中川雅裕(Ｈ３)
　　広報担当　　宮崎龍彦(Ｈ２)、丹羽宏文(H26)
　　会員管理担当　大石久史(Ｈ８)
　　会計担当　　讃岐徹治(Ｈ７)
監　　査：村手孝直(S55)、柘植勇人(S60)
学年担当
S54-S63年卒：山内智之(S62)、野本周嗣(S62)
Ｈ１-H10年卒：佐藤俊昭(Ｈ２)、栗崎功己(Ｈ３)
H11-H20年卒：竹田育子(H17)、藤井亜弥(三好) (H17)、滝澤直歩(H20)
　　原田生功磨(H16)、植松隆(H17)
H21-H30年卒：成田真実(H22,旧岡本)、山家佑介(H25)、加藤哲朗(H23)

医学部課外活動（文化部）紹介

愛媛大学医学部　MSG（Medical-service Studying Ground; 医療を考へる会）

代表 山田　佳樹（医学科５年）

こんにちは、愛媛大学医学部MSGです。私たちは、医学ではなく医療という視点で学校では教えてくれない広い分野を学ぼう、という部活です。私たちの活動内容としては、週に一度テーマを持ち寄って行う1時間半程度の勉強会、学外の医療施設や医療を考えるうえで意味のある施設の見学、の２つがあります。最近おこなった勉強会の内容は、医療技官や保健所業務とその意義、食物アレルギーやアロマセラピーについてなど幅広く、自分が少しでも興味を持った内容について部員同士が調べ発表するという形式をとっています。こういった勉強会では、授業で浅く触れた内容を更に深める事が出来ます。学外でのフィールドワークは、年１回から２回程度、長期休暇に合わせて行います。過去には、愛南町で保健所や病院見学をおこなったり、四国中央市にあるHITO病院で施設見学や訪問診療・訪問看護に同行させていただいたり、岡山にあるハンセン病療養施設の見学などをおこないました。

MSGの活動は緩く、バイトや兼部などが負担になりにくい部活です。勉強を主体とした活動ではありますが、厳しい部活ではなく、互いにお菓子などを持ち寄り、ワイワイと楽しく学べる時間を作ろうという部活です。愛媛大学医学部の創立当初から誕生した歴史ある部活の一つで、頼りになるOB・OGの方々のおかげで幅広い活動ができています。

これからも学科や学年を超えて、同じ医療に携わるものとして、楽しく幅広く活動していきます。

愛媛大学医学部　ネパール研究会

代表 玉井　葉奈（医学科４年）

こんにちは。ネパール研究会です。

私たちは毎年冬休みに、部員の内の４名がネパールに渡航し、ネパールでの医療・文化を学んでいます。なぜネパールなのかと言いますと、愛媛県宇和島市出身の医師岩村昇博士が、以前ネパールの僻地での医療に大きく貢献された繋がりから、毎年こうした学びの機会を頂いています。ネパールに渡航する部員の多くは、文化や環境が大きく異なる発展途上国での医療を学びたい、学んだことを大学での学習や将来働いていく上で生かしたい、という思いから入部しています。

ネパールでは、診療所・病院見学、小中学校訪問・生徒との交流、ホームステイを行います。病院見学では日本とは異なる衛生環境やシステムを実際に見ることができ、また小中学校訪問やホームステイでは人々の考え方や生活・宗教に触れ、視野が大きく広がります。また、渡航のみではなく、渡航前準備、渡航後の報告などの活動も行っています。渡航前準備では、現地コーディネーターの方や見学先とのやりとりを行い、部員でスケジュールを組み立てます。また、愛媛県在住のネパール人の方から、ネパール語や現地の文化を教えていただきます。渡航後には、愛媛県内の小学校（２校）での報告会、愛媛大学医学祭での写真展を毎年行っています。さらに、昨年度は、ネパール研究会の顧問を長年務めていただきました、石井榮一先生の最終講義に際し、ネパールを題材にした映画「世界で一番美しい村」の上映会を開催させていただきました。

今後も学生が海外の医療の現状を学ぶことができる貴重な機会を継続することができるよう、活動を続けていきたいと思います。

愛媛大学医学部　吹奏楽部

代表 三谷　雄樹（医学科３年）

《2018 年 12 月 24 日に開催された定期演奏会の模様》

こんにちは、愛媛大学医学部吹奏楽部です。私たちは、男子９人・女子32人の計41人で活動しています。今年は１回生が11人も入部し、より活気ある部活へと成長しました。

活動としては12月に開く定期演奏会に向けて練習していますが、その他にも新歓の時期に重信キャンパスでの路上ライブや医学祭での演奏、また去年から附属病院での患者さんへ向けたコンサートなどを実施しています。

我々は創部して約10年しか経っていない小さな部であり、年々定期演奏会の規模が大きくなっており、まだまだ成長できる部だと思っています。

また部で所有している楽器が足りず、東温市の中学高校の吹奏楽部さんにお借りしている状況であり、もしOB・OGの先生方で使っていない管楽器や打楽器などをお持ちでお譲りしてくださる方がいましたら、私たち吹奏楽部にお声をかけてくださるとありがたいです。

これからも歴史のある部へ成長するために、部員一同切磋琢磨し努力していきます。

愛媛大学医学部　EMSA（Ehime Medical Students' Associations）

代表 大野　彩夏（看護科２年）

こんにちは。愛媛大学医学部Ehime Medical Students' Associations 通称EMSAです。EMSAはIFMSA（International Federation of Medical Students' Associations；国際医学生連盟）*-Japanの愛媛支部で、現在総勢37名の個性豊かなメンバーと共に活動しています。私たちは、基礎・臨床交換留学の推進、LGBTs（性的少数者）の啓蒙・啓発や性教育、国際保健・地域医療・貧困など様々なテーマで活動を行っています。

2019年の交換留学では愛媛大学からはスウェーデンに２人、フィンランドに1人留学し、カナダとギリシャから１人ずつ愛媛大学に来ていただきました。留学生との交流を深めることにより、出身国についての理解を深めるだけでなく、日本の文化を再確認し医学を学ぶ姿勢に刺激を受けました。また、医学祭ではぬいぐるみ病院や、消化のしくみのエプロンシアター、アフリカ写真展などを行いました。例年通りたくさんの子供たちが参加し、笑顔のあふれる2日間となりました。松山土曜夜市では、愛媛大学医学部ブースをEMSAが担当させていただき、白衣体験や消化のしくみについてクイズやエプロンシアターを利用して子供たちと交流しました。最近は、都市部とは違う地方の貧困について学びを深めるため、メンバーが話を聞きに行く「貧困ツアー」、高校生の進路相談を医療系学生からの視点で行う「高校生企画」にも取り組んでいます。新しい企画を取り入れることで、ますます活気あふれる部活となっています。

今後は、OB・OGの先輩から引き継いだ基盤を大切にしながら、活動の幅を広げるために様々なことに取り組んでいきたいと思っています。

＊IFMSAは第2次世界大戦後の1951年にヨーロッパで設立され、現在は本部をフランスの世界医師会内に置いています。WHO（世界保健機関）、WMA（世界医師会）を始め、様々な国際機関、UNESCOやUNICEFなどの国連機関と公式な関係を結んでいる唯一の医学生団体です。

あとがき

９月に入りやっと猛暑から抜け出すことができ、虫の声が賑やかになってきました。医学科同窓会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか？

さて、ご存じのように昨年度から薬師神会長のリーダーシップのもと、同窓会の活動も色々と新企画がスタートし、同窓会報にも新企画が導入されました。このあとがきも「いろんな方に書いていただきたい」との会長からの依頼により、今回は私、坪井が担当することになりました。今年度の同窓会活動で印象に残ったことを、２点書かせて頂きます。

先ず、昨年度から始まった同窓生座談会の第２弾として、同期の２期生の皆さん（村上信五先生、村手孝直先生、岩田猛先生、兼光望先生、松田正司先生、坪井）にお集まりいただき、薬師神会長の司会でこの40数年の医学部の歩みを語って頂きました。先ず、座談会の記事には載っておりませんが、座談会参加者で最初に認識を一致させたのは、「１期生の方々は大変優秀で真面目な長男」、それに比べて「２期生は型破りな次男で、学生生活を多岐にわたってエンジョイしながらも、横のつながりが強く、伝統の無い中でフロンティアス・ピリットを醸成した」という点です。詳しくは今回の座談会記事をご一読下さい。

２点目は、同窓会総会の大変革です。それまでも総会は毎年開催されていましたが、平日の夕方医学部内での開催であったため、参加者数は役員数よりも少ない状況でした。これではいけないと、薬師神会長の提案で、今回初めて同窓会総会を夏休みの土曜日夕方、松山市内で開催しました。簡単な懇親会も行い、「同窓生相互の交流のチャンスをもっと作ろう！」さらに、総会の後は、「各同期会をリンクさせて頂き、同窓会活動の更なる活性化につなげよう！」をスローガンに、2019年８月３日（土）16時から伊予鉄会館で開催しました。同窓会総会には、幅広い学年から同窓生約40名余りが参加し、活発な議論が交わされました。

その中で、来年度（８月第１週の土曜日）も是非このような形式で同窓会総会を継続実施すること、2022年の医学部設立50周年に医学科同窓会として何らかの事業実施を検討すること、を確認しました。さらに議事の後、２名の同窓生に記念講演をしていただきました。26期生の米国 George Washington University, Assistant Professorの伊藤誠治先生には「プライマリケアマインドの循環器専門医を目指して：ワシントン DCに繋がった愛媛での転換期」と題して、米国での臨床医として氏の体験に基づいた成果を生き生きと語って頂き、また、２期生の名古屋市立東部医療センター病院長の村上信五先生には「人生、何はともあれ、運・鈍・根」と題して、氏の体験に基づく人生訓をざっくばらんにお話しいただきました。いずれも活発な議論を参加者に巻き起こしました。また、それに続いて行われた懇親会は、山下政克医学系研究科長の挨拶に続き、１期生の櫃本真聿先生の乾杯で始まりました。会場は一気に盛り上がり、閉会の時刻が来ても話は尽きず、あっという間に時間が過ぎ去りました。

来年の同窓会総会は、2020年８月１日（土）午後に松山で開催致します。同窓会員の皆様におかれましては、「８月第１週の土曜日は松山で会おう！」を合い言葉に、松山の地にお集まり下さい。また同期会の開催は、是非その日の夜にご計画下さい。よろしくお願い申し上げます。

この第35号同窓会報を通じて、医学部や、学生、卒業生の皆さんの各種活動をお伝えするだけでなく、同窓会員の皆様のネットワークの拡大の一助となることを切に願っております。皆様方のさらなる御発展・御健勝を祈念致します。

最後に、発行に御尽力頂きました皆様に深謝申し上げます。

同窓会幹事　坪井　敬文（愛媛大学プロテオサイエンスセンター：２期生）

同窓会懇親会場にて（筆者）
↓

《会員の個人情報に関する取り扱い》

愛媛大学医学部同窓会は、会員の個人情報の保護と適正な取扱いに取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

１．　個人情報の使用目的

同窓会が取得した個人情報は、以下の目的に使用されます。

・同窓会名簿の作成
・定期的刊行物（会報、名簿）の送付
・同窓会会費徴収のための業務
・事務連絡及び各種文書の送付
・支部会の行事開催に関する事務連絡及び各種文書の送付

２．　個人情報の提供

会員から情報の紹介依頼があった場合、折り返し対応させていただきます。また、第三者からの電話照会等での返答は致しかねますので、ご了承下さい。

３．　個人情報の管理

「会員名簿」は、施錠保管しており、「データベース」は、インターネットに接続していない専用ＰＣで独立した作業を行っております。

《次号会報原稿募集》

★同期会報告

幹事の方は、氏名、卒業年、開催予定日を事前にご一報下さい。

条件　１．正会員20名以上の参加
　　２．報告文、集合写真を提出（会報原稿）
　　３．会費未納者への納入勧誘
　　４．２年に１回

★学生海外研修留学報告・医学祭報告（学生会員）

学年、氏名を事前にご一報下さい。

条件　１．報告文、写真を提出（会報原稿）

《会費納入のお願い》

同窓会活動は、会員の皆様の会費で支えられております。会費納入をお忘れの方は、お早めに同封の用紙にてお振り込み下さい。

郵便振替NO. 01620－0－6644
加入者名　愛媛大学医学部同窓会
入会金を含む終身会費５万円

《会員名簿の不正使用禁止》

会員名簿は、会則により会費納入者のみ、一会員一冊の配布となります。

第三者に渡り不正に使用されますと、会員に多大な迷惑がかかります。他人に譲渡しないよう、また破棄する場合も特段のご配慮をお願い致します。事務局としても最大の注意を払っておりますが、皆様のご協力をあわせてお願い致します。なお、会員名簿の再送付は致しかねますのでご了承下さい。

注）卒業生と偽り、名簿の請求や他の会員の住所照会の問いあわせ電話があります。原則として電話での問い合わせには、即答致しかねますので何卒ご了承下さい。また、不審な業者から会員の方へ直接問い合わせがある場合も十分ご注意いただきますようお願い致します。

《お願い》

会員の皆様のご寄稿、ご意見及びご感想など是非お寄せ下さい。また、会報で取り上げてみたいテーマ、企画等アイデアがございましたらご一報下さい。お待ちしております。

お知らせ

第36回
愛媛大学医学部同窓会通常総会

次回通常総会の開催予定をお知らせします。日程が８月第１土曜日に変更となりました。特別講演会も予定しております。詳細につきましては、HPに掲載予定です。万障お繰り合わせの上、ふるってご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時：2020年8月１日（土）16時～
場所：松山市内を計画中
議題：事業報告及び会計報告、予算の承認、その他

連　絡　先

〒791－0295　愛媛県東温市志津川
愛媛大学医学部同窓会事務局
ＴＥＬ：089－960－5989（受付平日10時～15時）
ＦＡＸ：089－960－5989
E-mail：eusmdoso@m.ehime-u.ac.jp
ＨＰ：http://www.m.ehime-u.ac.jp/dosokai/igaku/